

子どもの証言と心理学の研究

国立研究開発法人理化学研究所理事，立命館大学 OIC 総合研究機構招聘研究教授，北海道大学名誉教授
仲 真紀子

私はお茶の水女子大学で、藤永保先生・内田伸子先生をはじめとする多くの先生方の薫陶をいただき、接続詞や助数詞といった言葉の習得、間接的要求や間接的拒否などの会話の研究を始めました。生態学的妥当性が強調されるようになり、自伝的記憶や子どもと大人の会話などの研究を進めるなかで、ある弁護士さんから、目撃証言の信頼性について検討してほしいという依頼を受けました。浜田寿美男先生・巖島行雄先生・伊東裕司先生・原聡先生らと3か月前に見た人物の顔を識別できるかという実験を行い、法と心理学がクロスする領域に足を踏み入れました。その後、子どもの証言の検討の依頼を受け、事件を目撃した／被害にあった子どもへの聴取が誘導的、暗示的になりがちであることを知りました。最初は「これは暗示」「これは誘導」と批判的な指摘をすることに終始していましたが、これでは子どもの言葉は法廷に届かないと思うようになりました。

1999年に英国ポーツマス大学での勉強会に参加したとき、子どもから正確に情報を得るのは難しいと話したら、英国でも同じ経験をし、子どもから正確に負担なく供述を得ることを目指す司法面接法のガイドラインを策定したと聞きました。問題を指摘するのではなく解決方法を提示すればよいのだと、目からうろこが落ちる思いでした。

2008年にJST（国立研究開発法人科学技術振興機構）／RISTEX（同機構社会技術研究開発センター）の助成でプロジェクトを立ち上げ、以降、文部科学省、再びJST/RISTEXと13年にわたり支援を受けながら司法面接の基礎研究、面接法や研修方法の開発を進めました。児童相談所、警察、検察などの専門家に司法面接の研修も行い、受講者数は1万5000人を超えました。2015年に児童相談所、警察、検察が連携して司法面接を行う協同面接／代表者聴取（子どもは各機関で繰り返し聴取を受けなくて済む）の取り組みが始まり、2021年には知的、精神的な障害を持つ成人にも拡張されました。司法面接では初期の供述を録音録画しますが、現在、法制審議会刑事法（性犯罪関係）部会で、その記録媒体を証拠として用いることができるか議論されています¹。

研究と社会実装の魅力に導かれてここまで来ましたが、今思うことは、そもそもなぜ誘導暗示なく聴取する必要があるのか、ということです。被害加害によらず年齢、障害、恐怖などの制約があるとき、いかにして話す権利を守るか。個々人が最大限尊重される社会のあり方が重要だと感じています。



なか・まきこ お茶の水女子大学大学院博士課程単位取得退学。学術博士（お茶の水女子大学）。専門は発達心理学、認知心理学、法と心理学。千葉大学、東京都立大学、北海道大学、立命館大学を経て現職。著書に『子どもへの司法面接:考え方・進め方とトレーニング』（共編著、有斐閣）、『法と倫理の心理学：心理学の知識を裁判に活かす：目撃証言、記憶の回復、子どもの証言』（単著、培風館）、『目撃証言の心理学』（共著、北大路書房）など。

¹ 法務省（2023）法制審議会刑事法（性犯罪関係）部会第14回会議配布資料。

『心理学ワールド』の 楽しみ方

特別企画



1998年の創刊準備号から始まった『心理学ワールド』はこのたび101号を迎えました。ここに特別企画をお届けします。本誌『心理学ワールド』を通して心理学の世界（心理学ワールド）を楽しんでいただきたいという趣旨です。今回は51号から100号までの約12年間を振り返り、テキストマイニングによる分析に加え、読みの立場と創り手の立場からご寄稿いただきました。心理学以外をご専門とする多くの方々からも原稿を頂戴することができました。特別企画をお読みいただくと、過去の記事が気になります（そういう仕掛けになっています）。51号以降は全ての記事が本学会のウェブサイトで公開されています。それらも併せてご堪能ください。

本誌編集委員長 片山順一

51～100号表紙デザイン

虎尾 隆 氏

「集められ、カットされ、バラバラに散乱したコラージュの材料には、それぞれリアルティがあり、単にどこかからの日常世界から切りとられた1個の断片にすぎない。しかし、組み立てられた全体は、どこかにあるようでどこにもない世界となる。まるで夢の世界のように」(虎尾隆作品集『Interior』2001年)。

これは作品制作のはなし。

一方、書籍など出版物の表紙装画などの場合、当然のことだけれども説明的であるよう求められる。(そうでない時もあるけど)だから難しい。自分の内なるイメージやインスピレーションを表現するだけでは成り立たない。「具象」と「抽象」の間を行ったり来たり、ああでもないこうでもない……さて落ち着く先はどこに。



私は、心の諸科学の基本概念と方法論、その倫理的問題について考察する科学哲学を第一の専門としております。心理学史もこの分野の重要なアプローチ方法で、本誌の「心理学史 諸国探訪」は、科学的活動が文化や歴史から切り離せないことに気付かせてくれますので、いつも楽しみに読んでいます。

これまで、私は心身関係や身体論についての研究を軸に据え、心理学者の方たちと共同研究してきました。自分の研究スタンスを、J・ギブソンの生態心理学と、メルロ＝ポンティの現象学を総合した立場として「生態学的現象学」と名付けています。

現在は、「顔身体学」という、心理学、文化人類学、スポーツ学、哲学などの分野を横断する新しい領域の構築と発展に取り組んでいます。対人関係に目を向けると、身体の中でも顔のもつ表現力は突出しています。『心理学ワールド』では、89号（2020年）「顔」と90号（同年）「人を区別する」に関連するテーマが扱われています。90号では私の共同研究者である山口真美氏や田中彰吾氏が寄稿していますが、哲学では決して扱われることのない「顔の左右の表現の違い」
立教大学文学部 教授
河野哲也

（大久保街亜氏）や、「サカナの顔」（堀田崇氏）といった89号のテーマも非常に興味深いのです。フランスのユダヤ系哲学者であるE・レヴィナスは、人間の顔に倫理的行為の根拠を求めました。しかし、動物や魚類、昆虫など顔をもつ生物はたくさんいます。また、その顔なるものに変工を加える入れ墨や美容整形、化粧行動（「顔の化粧」木戸彩恵氏）は、どう理解すればいいのでしょうか。こうしたことを考えた時には、レヴィナスの倫理学は、古典的な男性ジェンダーに偏った立場であるかのようにも思えてきます。

倫理学は、道徳性について考察する哲学の一分野ですが、心理学と倫理学は興味深い関係にあります。倫理学は、「どうあるべきか」という規範性に関わり、心理学は「どうあるのか」という事実性に関わると言われます。倫理学では、規範性を事実性から峻別しよ

うとする反自然主義と、その両者が明確な線引きができないと考える自然主義の間で議論が続いてきました。私は、「どうあるべきか」を、現状が「どうあるのか」から切り離して人々に要求することは、それ自体が倫理的問題を孕んでいると考えています。少なくとも、実際の私たち人間の行動を視野に入れなければ、実践的な規範を立ち上げられないと思います。

こうした観点からは、98号（2022年）の「『正しさ』を考える」は興味深い企画でした。公正性に関わる義憤と自己利益が関与する私憤との関係をめぐる上原俊介氏の議論は、哲学において、正義を感情に基づくと考える「道徳感情論」（現代の代表格は、M・C・ヌスバウム）と正義は感情に基づくべきではないと考えるカント的な「義務論」の対立に新しい観点をもたらしてくれます。感情のない人工知能は、正しい道徳的判断をもたらすのでしょうか。この点について谷辺哲史氏は鋭く問題提起しています。また、笹原和俊氏が論じているように、SNSなどで伝達される「情報」には、哲学の古典的な「真偽」の区別が当てはまらない面が含まれています。これまでの倫理学は、

テクノロジーの発展を度外視してきましたが、心理学はこうした前提を問い直しています。

あるいは、動物をどのような道徳的配慮の対象にすべきかという動物倫理も、人間と動物の絆についての文化的・歴史的な関係を抜きにしては語れません。この点で、92号（2021年）の「動物との絆」についての特集は非常に重要なものでした。権利や義務についての抽象的な言葉に満ちた倫理学を、人間的行動の有する事実性に根付かせて論じていくには、心理学からのたくさんの助けが必要であると、私は考えています。



こうのてつや 専門は哲学（現象学、心の哲学、理論心理学）、倫理学。博士（哲学）。『コロナ時代の身体コミュニケーション』（共編著、勁草書房）など。

哲学の領域から

生理心理学は人間の心と体の関係を明らかにするという心理学の一分野である。たとえば、緊張したときにかく「冷や汗」は、精神的な緊張による交感神経活動の高まりが皮膚の汗腺を刺激して生じた汗である。このような生理反応は皮膚電位を測ることによって定量化できる。生理心理学の計測対象は皮膚電位以外にも心電位、筋電位、皮膚血流、呼吸、血圧、瞳孔径などさまざまである。身体的な生理反応の計測だけでなく、脳波計、fNIRS（近赤外分光分析法）、脳磁計、fMRI（機能的核磁気共鳴撮像法）などを用いて脳の反応を計測する場合もある。

実は、生理心理学では地味な技術的革新が進行中である。私が20年前にfNIRS脳機能イメージングを始めた頃、生理心理学的な計測とはかく難しかった。当時はセンサーとアンプが別になった受動電極によるシステムしかなく、ノイズによく悩まされた。ところが半導体技術の進歩により、センサーとアンプが一体になった能動電極の普及が進んできた。これによって、環境ノイズの影響が激減し、皮膚電位、筋電位、心電位、脳波などの計測が格段にしやすくなった。もっとも、熟練研究者は受動電極システムでも巧みに計測を行える技を持っていたので、あまり能動電極の恩恵は感じていないかもしれないが、私のようなライトユーザーにとっては、劇的な技術革新といえる。

心理学に興味を持つ方々にとって、生理心理学的計測としてまず思い浮かぶのは、犯罪捜査におけるポリグラフ検査であろう。これは、皮膚電位、心電位、呼吸、皮膚血流など複数の生理心理指標を組み合わせて、犯罪容疑者の心理状態を探るという手法である。本誌でも、警察庁科学警察研究所や各県の科学捜査研究所の仕事として、犯罪捜査にポリグラフ検査が用いられていることが述べられている（64号「犯罪捜査を支援する」2014年、68号「科捜研で働く」2015年、73号「犯罪捜査のための心理学」2016年）。

一方で、近年、犯罪捜査における心理学の活用がポ

リグラフ検査から犯罪者の心理学的なプロファイリングへと変化しつつあるというトレンドについて越智啓太氏が解説している（51号「犯罪捜査の心理学の現在と今後」2010年）。たしかに、生理心理学的計測における技術革新はあるものの、ポリグラフ検査自体の本質にはあまり変化がないという面はある。日進月歩の脳機能イメージング法などと比べると、すでに確立した要素の多い生理心理学的計測に劇的な発展は期待しにくいかもしれない。

こういった経緯もあるのか、本誌で生理心理学的計測が取り上げられることは少ないが、近年盛んになりつつある社会的文脈に関する研究で生理心理学的計

測を有効活用した例を廣田昭久氏が紹介している（84号「なぜ顔が赤くなるのか」2019年）。その秀逸さの本質は、生理心理学の一つの側面である「生理学」を重視している点である。ここで取り上げた手法はレーザードップラー血流計による皮膚血流量変化の計測である。これを、驚愕を伴うビデオという心理的刺激への応答評価に適用した。この種の研究は、皮膚血流量が上がったか下がったかという単純な議論にとどまりがちだが、廣田氏は顔面における血管の配向や

それぞれの血管が受ける交感・副交感神経支配の差、さらにはホルモン分泌による液性の血管拡張も考慮した上で、一歩踏み込んだ議論を展開している。

心理学研究とはかく生体の反応という現象をブラックボックスにしがちであるが、廣田の論考は、心の作用する場としての体を生理学と解剖学の観点からとらえることの重要性を、あらためて気づかせてくれる。心と体という不可分の関係を探るという生理心理学の本質を理解する上で、重要な視座が得られる記事である。



だん・いっぺいた 主な専門はfNIRS脳機能イメージングの医療応用と消費者心理学応用。その過程で生理心理学の有用性に気づき、現在、マルチモーダル計測を模索中。

脳科学の領域から 生理心理学再訪

中央大学理工学部
人間総合理工学科 教授
檀 一平太

大学によるダイバーシティ推進のさまざまな取り組みが報じられている。そのために重視されてきたのが選考である。新任教員の採用から学生の選抜など選考手続きに関わっている方も多いのではないだろうか。そこで、ここでは選考の観点から『心理学ワールド』の関連記事を振り返り、その後に応用倫理領域での議論を紹介する。なお、本稿の内容は現在や過去の所属組織の意見を表すものではない。

まず、97号「男女格差とダイバーシティ社会への移行」(坂田桐子氏, 2022年)では、好意的性差別主義が紹介されている。これは女性への配慮が伝統的性役割と一致する場合のみであり、不一致な場合に敵対的態度がとられるものをいう。好意的性差別を受けた女性の活躍が妨げられる可能性が示唆されているが、差別する側もされる側も自覚しにくい点に注意が必要である。

次に、90号「集団を区別する — 違いは本質にこそあると信じる素朴理論」(塚本早織氏, 2020年)では、人の特徴を生得的な何かに求める傾向である心理的本質主義が取り上げられている。心理的本質主義の信念が強い場合、認知タイプの差を個人差よりも民族的な差に求める傾向がある

こと、また、ある集団に人間の本質が欠けていると判断された場合、当該集団への差別に繋がりがうることが指摘されている。ここでは、個人ではなく集団の特徴として認知することがある種の適応である可能性が示唆されており、問題の根深さを物語っている。

それでは、差別に関与しないようにする術はないのだろうか。52号「偏見の自己制御」(大江朋子氏, 2011年)は、偏見の抑制を中心に紹介している。しかし、偏見を抑制し続けることは難しく、リバウンドする傾向があるという。抑制方略の多くもリバウンドを免れないことが示されている。

自身の好意的性差別主義や心理的本質主義に自覚的であるとは限らず、また偏見を抑制し続けることも容易でなければ、ダイバーシティの推進どころか、無意識に差別に関与していることもあるかもしれない。

ここで無意識のうちに他者を差別した時の責任について考えてみよう。有責と言えるのは一般に、その人がコントロールできる環境にある時である。しかし、差別が蔓延している文化圏にいる時、バイアスに気付き、コントロールできるだろうか。不可能な行動を強制できない以上、そこに責任を負わせるのは不合理かもしれない。こうした観点から、有責性に対する疑念が唱えられることがある¹。

他方、『心理学ワールド』でも紹介されてきたように、差別に関連しうる心理的特徴は時代とともに知られるようになっていく。このような観点から、以前は不十分な情報から生じた帰結について免責されたことでも現代では有責となりうる。また現代に生きる人々が均等に責任を負うのではなく、雇用などの意思決定に多大な影響を及ぼす立場ではより大きな責任を負うことが強く主張されている²。この主張は、選考に際して知るべき心理的特徴や、その責任の重さについて、真剣に受け止めるべき問題を提起している。

女性研究者の採用拡大などダイバーシティ推進のさまざまな施策が行われているが、選考にあたっての準備は十分だろうか。本稿が選考時に求められる知識水準や責任を考え直す機会、そして新たな研究の端緒となれば幸いである。

女性研究者の採用拡大などダイバーシティ推進のさまざまな施策が行われているが、選考にあたっての準備は十分だろうか。本稿が選考時に求められる知識水準や責任を考え直す機会、そして新たな研究の端緒となれば幸いである。

領域から 応用倫理の

パーソル総合研究所 研究員

今井昭仁



いまい・あきひと London School of Economics and Political Science 修了。MSc in Philosophy and Public Policy。著書に『理論とケースで学ぶ企業倫理入門』(分担執筆, 白桃書房)。

1 Saul, J. (2013) Implicit bias, stereotype threat, and women in philosophy. K. Hutchison & F. Jenkins (Eds.), *Women in philosophy: what needs to change?* (pp.39-60). Oxford University Press. 2 Washington, N., & Kelly, D. (2016) Who's responsible for this? M. Brownstein & J. Saul (Eds.), *Implicit bias and philosophy, volume 2: Moral responsibility, structural injustice, and ethics* (pp.10-36). Oxford University Press.

哲学の関心は、常識的な行為者像の正確さ、価値(概念)や道徳(判断)の機能、研究方法論、観察不能な理論の対象とその概念の位置づけ等、多岐にわたる。『心理学ワールド』を読むと、心理学もこうした問いに関連していると感じられる。上原俊介氏「正しさに潜む『義』と『偽』」(98号, 2022年)と、唐沢穰氏「集団間関係と多文化共生社会の実現」(97号, 2022年)という、非常に興味深い記事をみてみよう。

上原氏の記事では、拉致行為に対する「義憤」が、「公正への敏感さ」とは独立に、被害者が自国民か否かで左右されるという実験結果が示され、これが実は自己利益により影響された私憤なのではないかと解釈される。そのうえで、コインフリップ課題の結果を紹介しつつ、この現象が「道徳的偽善」という一般的な傾向の現れであると示唆する。結びとして、道徳に誠実な仕方では動機づけられる人が本当にいるのか、という刺激的な問いを心理学で検討することが提起されている。

利己的で非道徳的な人間像は、思想史上では散見されるものだが、上記のような実証研究には、日常的な人間像を真に揺るがし、人間に期待できる道徳的性格や行為への現実的制約を示唆するポテンシャルが

あり、哲学的にも意義深い。一方で方法論上の懸念はある。自国民か否かで左右される感情を「義憤」でなく「私憤」と捉えることは、忠誠のような偏愛的なもの否定する公平性重視の実質的な倫理的基準を前提しているように見える。またこの研究の解釈が、集団的な利益の追求と自己利益の追求を同一視しているようにも見えること(自国民への偏向は、むしろ内集団・外集団バイアスの影響とみてはどうか)、「義憤」「私憤」、あるいはより一般的に「憤り」といった情動カテゴリーが見えない因子として存在してそれが質問紙の回答で測れると想定しているように見えること(情動カテゴリーの社会的構成主義や、自己報告への疑念を、脇においてよいのか)については、少し気になった。

唐沢氏の記事は、多様な人々が共生できる社会を築

くために心理学は何が提言できるか、という実践的な問いから始まる。相互理解と共生には、道徳判断がもたらす影響の理解が重要であり、この主題の学際的な検討に加わるのが一つの答えの途だと示唆される。道徳判断には通常、普遍的価値として多くの人が共有しているという期待が伴い、この判断を確信する場合には、同意しない人々を悪とみなし、非難や攻撃を先鋭化させる傾向がある。例えば移民に対する嫌悪にも、上の様な道徳判断の影響が考えられる。唐沢氏らの研究事例としては、日本では保守カリベラルかに関する自己評定よりも、文化的ナショナリズム、優越的ナショナリズム、愛国心、国際主義といった下位因子で構成

される国民意識のほうが、ジェンダー、移民、軍事、原子力発電、環境問題といった争点に関する回答を予測する、という結果が紹介されている。これは、保守・リベラルの意味づけに関する、日本と欧米の差異を示していると解釈されている。

「保守とリベラル」あるいは「右と左」という表現の意味からして、その対立の内実が文化に相対的なのは予想されることだろうが、国民意識の影響の強さが示されたことは、先の上原氏の記事とも相まって、印象的である。ただ上原氏が道徳

判断からの動機づけを疑う方向の検討を促すのに対し、唐沢氏のモデルはむしろその強さを前提しているようにみえる。道徳判断の因果的効力は、哲学上でも争点になるところで、大変興味深い。また唐沢氏が、道徳判断を下す際に普遍妥当性の想定が伴うとみているところは、多くの哲学者の考えとは近いものの、実験哲学の研究ではそれに疑問を投げかける結果も出ている(たとえば『実験哲学入門』勁草書房、第7章を参照)。この前提の成否の検討も、心理学と実験哲学の協働によって進むことを期待したい。



すずき・まこと 専門は哲学・倫理学。PhD (Philosophy)。著書に『実験哲学入門』(分担執筆, 勁草書房), 『ソーシャルワークのための「教育学」』(分担執筆, あいり出版) など。

哲学の領域から 道徳心理学について考える

名古屋大学大学院
人文学研究科 准教授

鈴木 真

2022年時点で、全世界のインターネット利用者は52億人と推定されている。世界の総人口の65%が、オンラインでやりとりができる時代が到来し、インターネットは世界共通のコミュニケーション基盤になった。『心理学ワールド』では、心とインターネットの関係に関してどのようなことが話題にされてきたのだろうか。それを調べるために、タイトルに「ネット」という言葉を含む記事を検索したところ、51号以降では9つが該当した。その中から2つを紹介したい。

59号（2012年）では、小特集「インターネットを用いた心理的介入」が生まれ、カウンセリングや心理療法にインターネットを活用しようという試みが紹介された。

2012年といえば、iPadなどのタブレット端末が普及し始めた頃である。同小特集の記事の1つ、富家直明氏「臨床心理サービスのインターネット活用と地方のこれから」では、当時の遠隔コミュニケーションの主流だったテレビ会議システムで、通信量の多い時間帯は音声が届かなくなるなどの現場の問題が紹介されている。都市部であればカウンセラーも多く、心に問題がある人はカウンセリングが比較的受けやすい。しかし、地方やへき地では、カウンセリングに通うのにも時間

とお金がかかる。そうした物理的問題を解決する上でも、インターネットを活用したカウンセリングが望まれていた。そんな当時の状況が描かれている。

期せずして、新型コロナのパンデミックによって、職場はもちろん、学校や家庭にもブロードバンドやIoTが普及し、Zoomなどの簡易ツールを用いた遠隔カウンセリングも広まり始めている。しかし、オンラインが当たり前になった時代だからこそ、当時どのような点が問題とされていたのかを温故知新的に知り、適切な心理的介入を行うために、本記事は有用である。

91号（2020年）では、小特集「インターネットとゲームへの依存」が生まれ、インターネット依存の実態や立ち直るためのプログラムなどが紹介された。2020年といえば新型コロナのパンデミックが発生した年で、

「ステイホーム」というコロナ対策スローガンもあり、私たちは生活のさまざまな部分をオンラインに切り替えざるを得なかった時期である。

同小特集の松崎泰氏・川島隆太氏「ネットとゲームへの依存が脳に及ぼす影響」は、インターネットを長時間にわたって利用し続けると、脳の報酬系や認知機能に関わる領域に悪影響が及ぶ可能性を指摘している。特にゲームでは、時間が増加することで線条体付近や言語関連領域で白質と呼ばれる中枢神経組織がまばらになると報告されている。インターネットの使い過ぎは、脳そして心にもダメージを与える可能性がある。

コロナ禍になり、SNS（交流サイト）で不幸なニュースをずっと探してしまうドゥーム・スクローリングが一時間問題になったが、現実を背を向けてネットを彷徨い続けることによって、日常生活に支障をきたす構造は類似している。インターネットの習慣から依存に至るまでに、どのようにして行動習慣が変容し、脳の構造に影響が及ぶのかに関して、今後の脳神経科学の研究の進展が待たれる。本記事を読むことで、2020年時点での見通しが得られるだろう。

ここで取り上げた記事は、心とインターネットの関係について、「心の不調をケアするためのインターネット」と「心の不調を引き起こすインターネット」という2つの側面を扱っている。デジタル社会の現在、インターネットは社会基盤であり、拡張された身体の一部でもある。今後、SNSやメタバース（仮想空間）の普及によって、対面以外のつながりや交流がますます増えていくと予想される。10年後に振り返った時、心とインターネットの関係はどのように変化しているだろうか。

の領域から 計算社会科学

東京工業大学
環境・社会理工学院 准教授

笹原和俊



ささはら・かずとし 2005年、東京大学大学院総合文化研究科修了。博士（学術）。2020年より現職。専門は計算社会科学。著書に『フェイクニュースを科学する』（単著、化学同人）など。

私は、眼科医であり、30年以上を視覚障害者の方々とともに歩いてきました。『心理学ワールド』の目次の中で、まず目に飛び込んできたのが、吉野由美子先生がお書きになった「見ようとする意欲と見る能力を格段に高めるタブレットPCの可能性（60号小特集、2013年）」でした。視覚障害当事者の著者による趣味のダイビングでのタブレットPCを使った小動物の観察体験が書かれていて、見えにくい人にも見る意欲をかき立て、見る能力を高められると述べておられます。視覚障害というと、とかく全盲をイメージしがちですが、日常生活の手がかりになるレベルの視機能を持っている方が視覚障害者の大多数であるということは、あまり知られていません。吉野先生の場合のように、新しいデバイスが障害者の生活を一変するということは、しばしば経験されることなのです。また、田中恵津子先生は「心理物理とロービジョンケア（65号特集、2014年）」で、まさにそのような視覚に障害を負ったロービジョンをどう測定するかについて述べておられます。従来、心理測定の手法は眼科医療に多く取り入れられていますが、視覚の感度が下がると、それが必ずしも適用できない場合があります。新しい評価法が今も求められています。そして、どのような機能低下が、どのような日常課題に影響しているかについても現代の眼科医療ではとても重要視されてきています。

一方で、障害を負った方の感覚や行動に注目することで、健常者の特性のある面が際立って観察できるということも少なくないのではないのでしょうか。心理学は健常者を対象とするものが多いと思いますが、特定の障害者を観察することで、健常者の特性が理解しやすいという場面があるのではないかとということです。視覚障害の方の行動は、脳科学で言われている視覚情報処理のどの部分が失われているのかという観点で評価できる場面があります。たとえば、視覚障害者の中には視線方向の情報が損なわれる中心暗点という状態の人とそれとは逆に周辺視野だけが損なわれる人

神戸iクリニック 院長
仲泊 聡

がいて、前者では大脳腹側路系の機能障害が生じ、後者では大脳背側路系の機能障害が生じると考えることができます。しかしながら、「視覚科学における分野融合（73号特集、2016年）」の中で「脳科学は飛躍的に進歩しているが、リアルな知覚体験の理解にはなかなかつながらずにじれったい。（中略）知りたいのは脳のハードウェアではなくソフトウェアである」（p.5）と語る西田真也先生と同じ気持ちを眼科医である私も持っています。医学の領域では、基礎的な知見を臨床に応用するトランスレーショナルリサーチが重要とされますが、最近ではその逆方向のリバーストランスレーショナルリサーチを行うことで、基礎的な知見をさらに深めること

ができると言われるようになっていきます。たとえば、触覚情報の重要性が最近のコロナ禍を契機に言われるようになっていきますが、これを際立たせている事象を視覚障害者の心理や生活のなかに垣間見ることができないのではないのでしょうか。渡邊淳司先生がお書きになった「VUCA時代のデジタル身体性心理学（98号小特集、2022年）」によれば、すでに技術的には触覚情報がインターネット上を流通する準備が整いつつあるとのこと。そして、多様な要因が絡み合い複雑で予

測不能な時代（VUCA）を乗り越えるためにも触覚情報の扱いが社会的に大変重要であるとのこと。私は本稿を読んで、触覚情報の重要性が凝集したモデルを視覚障害者の生活の中に見出せるのではないかと強い関心を持ちました。そして、眼科医療あるいは視覚障害者支援の領域からも心理学へのリバーストランスレーショナルなアプローチがいろいろとできるのではないかと期待しているところです。



なかどまり・さとし 立命館大学客員教授、東京慈恵会医科大学客員教授を兼任。医学博士。著書に『ポイントマスター!ロービジョンケア外来ノート』（共著、三輪書店）。

眼科学の領域から

94号「教育心理学と教育政策」(2021年)では「教育心理学の具体的な研究知見が教育政策の立案にまで影響を与えているとはいいがたい」と記されるが、比較教育学から見ると、「もう勘弁してください」と言いたくなるほど多大な影響を受けている。ここでは、心理学に乗っ取られた比較教育学について述べたい。

デンマークの自然保育が素晴らしいとか、日本の生徒の成績が下がったとかいう話を聞くことがあるだろう。ある国の優れた教育制度や実践を取り上げて、自国の政策に活かそうとするのは、比較教育学が古くから取り組んできた仕事だ。比較と言っても、必ずしもAとBを同列に並べるとは限らない。ガーナの教育改革などといった、ある国やエリアのみを対象とする地域研究も日本の研究者が得意としてきた分野だ。これも比較に含まれるのは、その事例を取り上げるからには、必ず他国(多くは自国)が念頭にあると考えるからだ。ところが、こうした地域研究は、国際学力調査(テスト)の台頭で、もはや伝統芸のような立場に追いやられている。

まだEメールもファックスも一般的でなかった1960年代に、心理学者らによって最初の国際学力調査が実施された。彼らは問題冊子を12か国に発送してから数か月間、調査が実際に行われているのを知る手段もなく、ただ待つしかなかったという。わずかな予算でようやく実施にこぎつけたが、調査の意義を固く信じる彼らにとっても、その成否は賭けの部分が大きかった。回答を分析する以前に、このような国際調査が実際に遂行できるかどうかを確かめることも研究目的に含まれていた。こうして始まった国際学力調査は、OECDの生徒の学習到達度調査(PISA)などにつながり、今では政策立案で頻繁に参照されるエビデンスになっている。

学力調査は心理学の研究手法を社会科学に応用したものだといえらる。53号「『試験』から見た心理学」(2011年)という特集では心理学に関して出題された問題が紹介されているが、国際テストの仕組み自

体が心理学者らによって用意された点はもっと強調されてもいいだろう。国際テストは教育政策への示唆を得るために実施している。教室の広さや時間割、教員給与、デジタル教科書の導入など、さまざまな要因が子供たちの学力に影響すると考えられてきた。

こうした客観的手法は人間臭い教育学と馴染まない部分もある。現地調査を尊ぶ地域研究の立場から見ると、調査が想定する「世界共通の子供像」に疑問が浮かぶ。例えば、教室でiPadを配ったら、クラウド・ファイルを共同編集して同級生と活発に議論を始める生徒がいるかもしれない。一方で、デバイスを受け取ったその足で質屋に売りに行く生徒もいるかもしれない。

地域ごとの教育文化は想像以上に多様で、固有の背景がある。日本を見ても、動物飼育や無言清掃、集団登校など、豊かな文化が根付いている。勉強ができる子ほど自信がないという事象や疑問を抱きながらも守られ続ける校則やベルマーク活動なども、地域研究として見ると興味深い。

96号「社会における心理学の誤用とどう向き合うか」(2022年)では疑似心理学への懸念とアカデミアの役割が書かれているが、私は、比較教育学(者)の新たなライバルはTwitterだと思っている。国際学力調査の技術が高度化しているのに対して、地域研究はコモディティ化しつつある。海外旅行も教育視察も手軽になった。留学や国際結婚で海外に暮らし、ブログやオンラインセミナーで現地の教育事情を発信する人も増えている。比較教育学の裾野は着実に広がっている。喜ばしい一方で、玉石混淆の情報はアカデミアと地続きになった。地域研究は、今度はTwitterに乗っ取られつつある。

領域から 比較教育学の

信州大学大学院
教育学研究科 准教授
林 寛平



はやし・かんべい スウェーデンに4度留学、現在ウプサラ大学客員研究員。専門は比較教育学。近著に『北欧の教育再発見』(北欧教育研究会編、明石書店)。

憲法研究者の末席を汚す身としては、憲法学との連関に注意しながら『心理学ワールド』に触れるのであるが、広範囲にわたり多彩な連関があることに驚かされる。紹介すべき記事を絞り込むのは容易でないが、狭い個人的な研究関心から記事を2つだけ取り上げたい。

61号「社会的クリティカルシンキングのすすめ」 (2013年)

「批判」という日本語には否定的な意味合いが含まれることが多いとして、あえて「クリティカルシンキング」を「批判的思考」とは訳さない同記事は、その基本的な（欧米的な）含意である「論理的で偏りのない思考」が日本人には肯定的に高く評価される一方で必ずしも好まれないという事実（調査結果）に注意を喚起する。そこで大切とされるのは論理的な思考に対するポジティブなイメージの確立である。ではどうすべきか。同記事は、論理的な思考だけをポジティブに捉えるべきとは主張しない。クリティカルシンキングの内実として「文脈や文化に依存した、現実世界において、より意味のある思考」を付加すべきとする「第二派」の議論を参照しつつ、日本では、後者の思考を付加的な要素ではなくむしろ基本的な要素の一つとすることがクリティカルシンキング全体へのポジティブなイメージの確立につながると主張する。そして、他者の存在を前提とした思考、すなわち「社会的クリティカルシンキング」を促す。同記事には、論理性が求められる学問である憲法学もまた、論理性の名の下に欧米的な考え方を押し付けるだけのものになってはいないか点検されるべきことを思い知らされる。仮にそうなら、多くの日本人は憲法学を好ましいものと思わないのであろうから。

新潟大学法学部 准教授
栗田佳泰

97号「ふしぎの国の民主主義の通文化的構図 — 統治の不安概念を育てる」(2022年)

より直接的に憲法学に関連するのが同記事である。

民主主義は憲法の採用する前提の一つであり、憲法学が伝統的に扱ってきたテーマの一つでもある。一方、必ずしも日本の現実に適合的な規範理論が追求されてきたとは限らないという指摘もある。同記事では、民主主義との関連で興味深いいくつかの事実が紹介される。その中で、近年の日本人の抱く戦争への不安の「並外れた高さ」などからは、日本人の「統治の不安」が看取されるという。そして同記事は、そのような不安を日本人が政治参加で解決しようとはしていないと見られることに警鐘を鳴らす。とくに興味深いのは、その原因の一つとして同記事が推測する次のような事実、すなわち、「民主主義に対する評価や制度の信頼」

に対しては欧米的な価値観が反映される一方、「政治参加や他者への一般的信頼」に対してはアジア的価値観が抑圧的な形で反映されるという一貫性のなさである。同記事の折り出す「統治の不安」は憲法学においても問題となりうるものであろう。そんなアジア的価値観など捨て去るべきと言ったところで解決になりそうにないことについては、先の記事をあらためて紹介するまでもない。

さて、わたしの関心は欧米由来の立憲主義がいかにして

東アジアの一国である日本の多くの人々の腑に落ちるかにある。ここまで見てきたところからすれば、それには論理的で客観的な正しさを訴えるだけではならず、また、欧米的な価値観とアジア的な価値観とのあいだで思い悩んでいる日本人にそれら二つの価値観の和解を可能にするような思考を提示していく必要もあるように思える。

心理学は人の心と行動の科学である。その知見の応用範囲が狭いはずがない。今後もこのような学際交流の場に期待している。

憲法学の領域から



くりた・よしやす 2006年、九州大学大学院法学府博士後期課程単位取得退学。専門は憲法学。主著に『リベラル・ナショナリズム憲法学』（法律文化社）。

『心理学ワールド』創刊100号、誠にありがとうございます。私はアメリカの大学に正規留学する学生を支援する留学団体で、キャリアアドバイザーをしています。26年間この仕事をする中で6000人以上の日本人留学生のキャリアカウンセリングを担当し、日米のグローバル企業に多くの卒業生を輩出して参りました。

アメリカの大学という全く新しい世界の中で頑張っている学生たちと長いスパンで関わっていくと、さまざまな彼らの変化に遭遇します。異文化の中で今まで抑えてきた感情や行動を良い意味で解放し、早々にトランスフォームしていく学生、逆に留学という過度のプレッシャーからメンタル的なサポートが必要になり、大学の心理カウンセラーの方にお手伝いをしていただきながらゆっくり変化していく学生等々。その速度はさまざまですが、ほぼ確実に変化・進化していく彼らを見ることができるのが、この仕事の醍醐味だと思っています。

今回、ご縁あって寄稿の機会をいただき『心理学ワールド』の記事を拝読する中で、今まで何気なく見てきたそういった学生たちの変化が心理学的に説明できるものも多く、非常に興味深く読ませていただきました。今回はそんな私が特に共感し興味深く読ませていただいた2つの記事を紹介させていただきます。

亀井宗氏「自己肯定感が育つ場所」(100号, 2023年)

私が長年アメリカに住み、日本人留学生を指導する中で、最も日本人に欠如しており、そのために大きく機会損失をしていると感じるのが「自己肯定感」です。留学した学生たちが確実に変化をしていくのは、アメリカの教育現場にはこの「自己肯定感が育つ場所」があるからだということを再認識させてもらったがこの記事でした。キーワードとしている「育ちを邪魔しない」「主体性と楽しむ力を意識づける」「自由な自己表現」等はまさにアメリカの大学の特徴的な強みですし、指導者やスタッフの多くの方が、学生を一人の人間としてリ

スペクトルし許容する姿勢があること、また本音で話せる関係性を作り出すのが実に上手いことは、まさに自己肯定感を育む環境作りが自然にできている要因の一つだと考えています。もちろん、この環境を作り出せているのは文化の違いが大きいことは明らかですが、どんな文化を持つ指導者もアメリカにいと上記のような資質を持つようになるのは、環境から起きた後天的な変化も要因であると感じています。日本国内にいても日本人がもう一歩「グローバルトランスフォーメーション」するために、是非さまざまな立場の方に読んでいただきたいと感じた記事です。

領域から アドバイザーの 留学生

NCN 米国大学機構
就職指導室 室長

葉 真紀子

笹原和俊氏「SNSの中で“つくられる真実”と“対立する正しさ”」(98号, 2022年)

SNSの発達とともに世界中のひとと簡単につながりを持ち、ウェブで検索をすればどんな情報も商品も手に入る時代。一見、格段に世界が広がったように見えますが、実は自分と似た価値観や興味関心をもつ人とばかりつながり、同じような情報ばかりが流通する閉鎖的な情報環境ができていたり、ユーザの個人情報を学習したアルゴリズムにより、その人にとって興味関心がありそうな情報

ばかりがやってくる環境ができていたり。この記事はそんなデジタル社会における問題を分析し、提言しています。この記事を読んだ時、特に最近感じている学生や保護者の発言の偏り、危うさは、この問題に大きく起因しているなど脅威を感じました。職場も学校もテレワークやオンラインが増え、デジタル社会で起こっているその脅威はこの数年でさらに強化しているはず。自分自身も含めて社会全体が十分にこの環境を理解し、意識して対応する力を身につけなくてはならないと切実に感じさせられた記事でした。



よう・まきこ 青山学院大学卒業後、化粧品会社を経て渡米、現職。留学生のセミナー企画・講師、キャリアカウンセリングを担当。キャリア・デベロップメント・アドバイザー。

本稿では文化人類学のマルチスピーシーズ民族誌の観点から『心理学ワールド』を読み、心理学にとって学術的な意義を持つ「マルチスピーシーズ心理学」は展開可能なのか、そして逆に心理学的知見は人類学のマルチスピーシーズ民族誌にどのように与しうのか考えよう。

マルチスピーシーズ民族誌とは「人間と他種（さらには生物種にとどまらず、ウイルス、機械、モノ、精霊、地形も含む）の絡まりあいから人間とは何かを再考する分析枠組み」である¹。近年の文化人類学では人間中心主義的な研究のあり方を再検討し、脱人間主義を意識する動きがある。その中に位置づけられるマルチスピーシーズ民族誌は、人間が他の諸存在から独立したものではないという考えに基づき、人間と非人間の行為主体性を対称的に扱う。

例えばハンセン氏は北十勝の酪農業における人間と牛と機械の関係を論じた²。大規模な機械的搾乳システムの導入以来、人間も牛も一望監視的な統制の下に置かれるようになった。牛も牧場で働く非熟練労働者も、社会から排除され、機械のリズムに合わせて生きている。一方で機械の外では、牛と人間は種を超えて情動を共有し、「個人的」で双方向的な関係も築くという。

ところで本誌においても牧場の牛に注目した動物心理学の記事がある。「牧場の牛たち、みんな同じに見えますか」（山田弘司氏、69号、2015年）である。行動データ測定を通して牛の性格を明らかにした山田氏は次のように述べる。「性格は生まれつきの気質に環境や経験による修飾が加わったものとされている。実験動物ではないので、環境のコントロールは難しい。牧場が違えば飼育環境が異なり、集団飼育が関わると他個体からの影響も加わってくる。また、飼育環境の情報を得るため、飼育状況を逐一記録するのも現実的でない。そこで、環境や経験による性格の違いの研究はあきらめ、生まれつきの性質である、気質の測定に

焦点を絞ることにした」。

これは他種との絡まりあいの存在を示唆する興味深い文章である。牛が飼育環境や他個体との関係性の中で性格を形成することが示されているからである。心理学の観点から見れば（統制のとれた実験にすることは困難かもしれないが）、飼育環境や他個体との関係を長期観察し緻密に描き出す質的研究によって牛の性格形成過程を解明する「マルチスピーシーズ心理学」も展開可能であろう。

他方で本記事は人類学的研究にとっても興味深い情報を含んでいる。山田氏によれば、牛の精子の期待される性質が乳用種雄評価成績のカタログに示されるが、そこに温順性（感受性、神経質さ）もスコア化され加えられた。牛の管理しやすさの参考にするためという。これは、性質のスコア化によって牛の統制が進んでいることを示している。管理しやすい気質の牛の精子が選択され、人間にとって都合が悪い気質の牛は排除・淘汰されてゆく。ハンセン氏が描いた牧場の一望監視装置の統制下に入る以前に、生まれる前から統制が始まっているのである。科学技術と人間、動物の絡まりあいという点から検討に値する現象である。

ただし同時に山田氏は、牛に頻繁に接し世話することで、牛が人間に不安を持たず寄ってくるようになり、世話がさらに楽になるとも述べている。この点が興味深いのは、管理しやすい牛に育てる上で牛と人間の情動的な接触が必要なことである。牛と人間の情動を分断するスコア化による管理と、管理しやすい牛を育てる情動的な関わり。この複雑な絡まりあいを読み解くことは、心理学と人類学の両方にとって重要であろう。

領域から 文化人類学の

立命館大学
総合心理学部 准教授
澤野美智子



さわの・みちこ 博士（学術）。専門は文化人類学、医療人類学。著書に『乳がんと共に生きる女性と家族の医療人類学：韓国の「オモニ」の民族誌』（単著、明石書店）など。

1 近藤祉秋・吉田真理子（編）（2021）食う、食われる、食いあう。青土社。 2 ハンセン、P.（2021）乳牛とのダンスレッスン。前掲書1（pp.107-139）。

私は心理学系の学部でジェンダー心理学や統計学の授業を担当している。ジェンダー心理学の授業では学生からコメントをもらうことも多く、ジェンダーステレオタイプをもつケースにしばしば直面する。たとえば、「男性のほうが〇〇、女性のほうが〇〇」という言説を安易に受け入れていることがある。

これに関して、『心理学ワールド』96号「社会における心理学の誤用とどう向き合うか」（四本裕子氏、2022年）を興味深く拝読した。「社会における心理学の誤用」は学生においても生じうるものに思われる。たとえば、テレビやインターネットの記事などでは「男性脳・女性脳」といった説明によって、ジェンダーステレオタイプが生産されている。ただし、科学的な根拠がないものについては、ただの言説だとして理解をすればよい。

ところが、科学的な根拠を伴って発表される性差があり、これを判断するには「心理学リテラシー」が必要となる。とりわけ、統計学によって「裏付け」された研究成果には注意が必要である。68号では特集「その心理学信じていいですか？」が生まれ、心理学研究がこれまで使ってきた統計的手法の課題と展開が、また「統計的に有意？ — 帰無仮説検

定でわかること・わからないこと」（大久保街亜氏、2015年）では有意性検定の課題が紹介された。研究において統計的検定はよく用いられており、「5%」や「1%」というあたかも正当な基準により運用されているように見える。しかしながら、性差研究でも、統計的検定により有意な差がみられたとしても、その差はあまりにも小さく実質的な意味がほとんどない場合もある。また、96号「社会における心理学の誤用とどう向き合うか」においても指摘されるように、統計的な検定によって性差がみられたからといって「女性」と「男性」が全く異なる特徴をもつわけではない。分布を確認すれば、多くの者は同程度である場合もある。

以上のように、「心理学の誤用」はジェンダー心理学とその教育において重要な関心である。それでは「学生による心理学の誤用」を生まないために何が必要となるだろうか。この領域の問題をまとめたカプランら¹を参考に三点述べる。

第一に、心理学が誤用された例や歴史を学ぶことは有益であろう。ジェンダー心理学に関していえば、科学的手続きが研究者の偏見から自由ではないこと、それにより心理学が誤用される可能性があることを理解しておく必要がある。学生もまた、自身の研究によって差別に加担しうることを理解し、慎重に心理学の研究発表をおこなう姿勢が必要である。

第二に、統計学や研究計画に対する理解を深めることが重要である。統計的検定や統計解析を十分に理解するためには時間がかかるが、統計ユーザーであっても統計学の課題や限界を理解することは重要である。また、統計学だけではなく、性差に関わるバイアスが極力生じないように、研究計画全体についての深い理解も求められる。

第三に研究によって明らかになった性差を、生物的、生得的なものとして解釈することには慎重であるべきだろう。

性差がみられたときにそれを生得的なもののみならず、さらには、固定的で変えられないものとして解釈することは非常に危険である。現在の社会でみられる性差は環境に大きく依存するものである。人間はさまざまな環境や経験によって変わることが可能であり、こうしたことも心理学の豊かな研究が示してきた通りである。

統計学から ジェンダーの

立命館大学
総合心理学部 准教授
高松里江



たかまつ・りえ 大阪大学人間科学研究科博士
後期課程修了。博士（人間科学）。日本学術
振興会特別研究員（DC2）、大阪大学人間科学
研究科助教を経て現職。専門は社会学。

¹ Caplan, P. J., & Caplan, J. B. (2009) *Thinking critically about research on sex and gender* (3rd ed.). Pearson Allyn and Bacon. [カプラン,カプラン/森永康子(訳) (2010) 認知や行動に性差はあるのか. 北大路書房.]

筆者は行動経済学を専門とする経済学者であるが、縁あって現在は心理学部に職を頂いている。行動経済学という心理学の隣接領域を専門とするものの、2017年に現職に着任するまでは、心理学との関わりはとて少なかった。日本心理学会には2019年に入会し、同年の第83回大会では実行委員を務め、招待講演「行動経済学がつなく心理学と経済学」を開催した¹。また、学部で心理統計を教えていた関係で、教育研究委員会の心理統計法標準カリキュラム作成小委員会の委員を現在務めている。

日本心理学会と日本経済学会は、同じ学会とは思えないほど多くの違いがある。私の印象では、日本経済学会の活動は、最近アウトリーチ活動が増えているものの、研究活動に特化している（これはこれで一つのあり方だと思う）。年次大会（春・秋の年2回）でおこなわれるのは大半がオリジナルの研究報告であり、企画セッションやシンポジウムは少数である。機関誌も英文査読誌の*Japanese Economic Review*と、年次大会の発表などをまとめた書籍が毎年1冊あるのみだ。

私が日本心理学会に入会したあと、まず驚いたのはその活動の多彩さである。学術大会

での発表数は非常に多く、研究発表のみならずさまざまな企画セッションやシンポジウムが開催されている。主催・後援のイベントも多数開催されている。その中でも『心理学ワールド』はさまざまな人に読みやすくデザインも優れた機関誌で、一際印象に残っている。前置きが長くなってしまったが、私なりの視点から『心理学ワールド』の中からいくつか特集を紹介したい。

94号（2021年）の小特集は「政策と心理学」であった。分野外の方には感覚が掴みづらいかもしれないが、経済学は政策科学としての側面が大きい。このため、心理学と政策はどのように関わるのだろうと考えて手にとった。中身を見ると、4記事中の3記事が「ナッ

ジ」に言及していた。ナッジとは行動科学の知見を用いた人々の行動を変える手法の総称であり、行動経済学と関わりの深い概念（ただし、行動経済学＝ナッジでは全くない）である。行動経済学は心理学から発想を得た領域であり、経済学はもともと政策と関係が深い。このため、心理学は行動経済学を経由して政策に伝わっているのかもしれないと感じた。とはいえ、行動経済学で扱っている心理学の概念はその一部に過ぎない。個人的には、現状のナッジでよく紹介されるトピックのほかにも、心理学で扱われている研究は政策応用が可能なものが多いように思える。今後は心理学のさまざまな概念が政策にも応用されるようになると良いのではないかと感じた。

私が入会する前の特集になってしまおうが、82号（2018年）の小特集「クラウドソーシング——心理学データの新しい姿」はとても参考になった。心理学は一次データの収集が経済学よりも進んでおり、経済学者は周回遅れでデータ収集方法を学んでいる現状がある。クラウドソーシングでの収集にも一歩先をいっており、本特集は非常に参考になった（記事を参考に、『日本労働研究雑誌』に「インターネットを利用した『経済実験』の動向と展

望」を執筆した²）。

このように、『心理学ワールド』は（行動）経済学者にとっても、情報収集のために有用な媒体である。今後の発展を祈念している。また、経済学も政策やビジネスの現場とも関わりが深くなっていることから、研究活動を伝える媒体がより求められるだろう。経済学でも同じような媒体を作れないかと考えたい。



もり・ともはる 大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士（経済学）。専門は行動経済学。著書に『経済論文の書き方』（分担執筆、日本評論社）など。

領域から （行動） 経済学の

立命館大学
総合心理学部 准教授
森 知晴

1 大竹文雄・森知晴（2019）日本心理学会第83回大会。https://doi.org/10.4992/pacjpa.83.0_SL-001 2 森知晴（2019）日本労働研究雑誌, 705, 2-7.

実験心理学との出会い

大学の教育学部に入学した1977年。教養部で大山正先生の心理学の授業を受け、知覚や感覚の不思議さを知り、知覚心理学の虜になった。そのおもしろさに刺激され、2年間の教養部の間に野口薫先生、上村保子先生、御領謙先生、非常勤でお見えになっていた東京女子大学の故古崎愛子先生と元慶応義塾大学の古崎敬先生ご夫妻の授業を含め心理学の授業を5つも受講していた。それだけでは飽き足らずに上村先生の担当する総合講座「認識と行動」等を受講し、人間科学の各分野の先端研究の様子を知り、心躍らせた。併行して受講していたのが教養部の「心理学実験演習」だった。この演習では教養部の学生を対象に知覚心理だけでなく、各分野の心理学実験を経験させてくれた。当時、非常勤でいらした、元慶応義塾大学の増田直衛先生、元障害者職業総合センターの田谷勝男先生、敬愛大学の藤井輝男先生ら、若手の教務補佐や非常勤講師の先生方から直接実験の手ほどきを受けた。演習では知覚関係の実験が多かったが、実際の場面では実験をおこなう上での微妙な機械操作や、刺激の提示の微妙な加減など直接レクチャーを受け、仲間と苦心して結果をレポートにまとめたことを思い出す。

「心理学ミュージアム」の2つの記事

今回あらためて63号「心理学ミュージアム」の「1945年以降の台湾における、古典実験心理学機器の運命」（櫻井正二郎氏、2013年）、68号「『実験心理学ミュージアム』から『心理学ミュージアム』へのお引越し」（吉村浩一氏、2015年）の記事を読み、この心理学実験演習の様子を思い出した。ちょうどこの頃、大学にもコンピュータが導入され心理学実験もアナログの機械的な刺激の提示から、コンピュータを使用したデジタルの刺激提示へと変わる時代であった。当時はコンピュータによる自在に刺激を変化させる利便性、正

確性に目を奪われた。しかし、あらためて櫻井氏、吉村氏の記事にあるような古い実験機器を見るにつけ、当時のアナログな機械をチューターの先輩から原理を学びながら操作し、機器を微調整する経験が、実験から学ぶ法則の理解に役立った事を思い出す。教育学部の専門課程に進んでからも、教養部の心理の研究室には毎日のように顔を出し、当時進めていた障害児の脳波の光応答性の実験の様子を教室の先生方と話し合いながら、実験装置を試行錯誤しながら製作し、実験を進めることにこの経験が活かされたと思う。また、そんな折りに、研究室に来ている心理の学生たちとしばしば話題になったのは、何度も通った秋葉原の店の

情報や、大学近くの電子機器製作の工場の親父さんからのアドバイスだったりした。こうして出会った異分野の人、市井の職人さんたちと重ねる議論もまた、新たな手立てにつながるヒントになった。

新たな「ひらめき」のために

こうした一見関係のない場での人との出会いや、金曜日の夕方、授業を終えてからの研究室での非常勤の先生方との雑談からのアドバイスやヒントが自分の実験に役立っていた。そしてこうした仲間や、技

特別支援教育 の領域から

術を持つ市井の人々と協働する経験は卒業後の教員としての実践研究の進め方に大きな影響を与えてくれたとあらためて思う。現在はパソコンがすべてをコントロールし、ボタン一つでプログラムを実行することで誰もが失敗せずに実験を終えることができる。その意味でこうした古典的な実験機器に仲間とともに手を触れ実際に操作し、原理を導く過程を追体験することは今の若い研究者にとっても刺激となるだろう。そんな経験が新たなひらめきを生むヒントになるであろうことを信じてやまない。



むくの・ひかる 千葉大学教育学部卒業。千葉大学教育学部附属養護学校、千葉県立特別支援学校教員・校長を経て2017年より現職。専門は特別支援教育、キャリア教育。

川村女子学園大学
教育学部 教授
向野 光

ユーザー体験 (User eXperience: UX) は、ユーザーがサービスや製品を通じて得る体験のことです。私は視覚科学の研究で学位を取得した後、民間企業でUXコンサルタントとして働いています。サービスやアプリの企画に携わり、ユーザーの状況や課題を調べて、課題を解決したり、新しい価値を楽しんだりできるように体験設計をするのが主な仕事です (この原稿はプライベートの時間で書いています、念のため)。

ユーザー理解が非常に重視される職域にいることもあり、心理や行動、視聴覚の特性など、学ぶべきことやアップデートすべきことは尽きません。多職種の仲間たちやクライアントとの連携もふくめ、『心理学ワールド』で扱う話題はすべて貴重な情報の宝庫です。

大学院で感覚・知覚心理を勉強していた私には、最初はどのように自分のスキルを役立ててよいかわかりませんでした。心理物理学的測定法を使ってユーザーを幸せにする先輩の記事 (65号「心理物理とロービジョンケア」2014年) を読んで、勇気もらったのを覚えています。

病気などでいきなりロービジョンを抱える方も多くいます。本を読んだり、孫の楽しそうな写真を眺めたりといった、今まで当たり前でできたことができなくなって落ち込んでいたロービジョンの方をターゲットユーザーとして、よりよいユーザー体験を提供するサービスを設計するなら、どんなものがよいでしょうか。例えばつらい気分をやわらげるカウンセリングサービス? 地域の福祉サービスにつながりやすいような、キュレーションサービスなども考えられるかもしれません。

田中先生たち視能訓練士がユーザーのために提供しているのは、「適切な支援機器を提供することで、できることを増やす」ことです。できることが増えれば、不安な気持ちが低減するかもしれません。ユーザーの課題を解決し、より豊かな生活を支援する強力なサービスといえるでしょう。

そのユーザー体験を支えるのは、心理物理学的測定

法や基礎的な視覚科学の知見です。視覚情報処理には、空間周波数解析をする過程があると考えられています。文字も表情も、まわりの景色も、どんな周波数をどのくらい感度良く受け取れるかによって全く見え方が異なります。コントラスト感度測定や、実際に見るであろうものと似た性質をもつ刺激 (文字・文章・顔など) を使った見え方の評価が行われています。

視覚の特性と、刺激の関係で見え方が異なるということは、刺激側の工夫も重要であることを意味しています。デザインの現場にいますと、アクセシビリティ配慮の話はよく上がるのですが、輝度コントラストをピクセル値から算出した相対値で計算するなど、かなり簡略

化されていて、歯がゆい思いをすることも少なくありません。ユーザーはそれをどんなデバイスで見るの? 画面の大きさは? ユーザーと画面の距離は? 照明はどんなふうに当たるのか? これらの条件によって、必要とされる輝度コントラストはかなり異なるはずですが。

視覚科学の基礎知識をそのまま伝えても、デザイナーにはうざったく感じられるでしょう。自分たちのデザインにケチをつけられたと感じる可能性すらあります。渡邊先生が紹介されていた「研究を編集する」という視点を参考に、コミュニケーションの方法を考えているところ (96号「研究を編集し他者との関わりの中に価値を生み出す」2022年)。先生はこのような立場を「中心的ではない」と謙遜しておられましたが、研究の価値の伝え方に迷っていたり、学際的な分野で活躍したいと考えていたりする方にとって、光明となる考え方であると感じます。

領域から UXデザインの の

フェンリル株式会社
UXコンサルタント
大西まどか



おおにし・まどか 博士 (生涯人間科学)。専門は視覚科学、心理物理学。2021年より現職。人間中心設計思考に基づいたWebサービス開発や研究・調査コンサルティングに従事。

はじめに

人間とはどのような存在なのか、どのような特徴を持っているのか、人間に対する問いは宗教や哲学にとっても永遠のテーマです。では心理学はどのような切り口でこの問いを探究しているのでしょうか。『心理学ワールド』は私のように心理学を専門としていない者にも、分かりやすく丁寧に、心理学の豊かな世界を示してくれています。興味深い多くの記事の中からいくつかの記事を紹介したいと思います。

「思いやり」の心理学

キリスト教の教えに「隣人を自分のように愛しなさい」という隣人愛の教えがありますが、キリスト教では思いやりを持って困っている他者に手を差し伸べることが大切なこととして私たちに求められています。「思いやり」が心理学の研究対象にもなっていることは興味深いことです。91号(2020年)では『『思いやり』の発達科学』が特集として生まれ、鹿子木康弘氏の記事では、乳幼児でも「他者の利益となるような自発的な行動」を取る傾向(向社会性)が実証されていること、岡田直大氏の記事では、実験により向社会性は脳神経基盤と関連し遺伝的な影響が見られること、高岸治人氏の記事では、オキシトシンという9つのアミノ酸で構成されたタンパク質が向社会行動に重要な働きを持つこと、長谷川真里氏の記事では、思いやりを向ける対象が年齢とともに選択的になることが示されています。また76号(2017年)の唐澤真弓氏の『『思いやり』のパラドックス——文化比較をするということ』では、幼年期の思いやりという他者理解の能力の確立が日本人よりも欧米人が5か月ほど早いという文化比較研究が紹介されています。人間の本質を理解するために、調査や実験や観察などさまざまな手法を用いて、心理学的研究が今日なされていることが分かります。

東京女子大学
現代教養学部 教授
佐野正子

連載「私のワークライフバランス」

86号から最新号まで続いているこの連載は、研究や教育の仕事と、出産・育児や親の介護をしながらの生活とのバランスをどのように取るか、どのように乗り越えてきたか、あるいは今どのように努力して取り組んでいるかなど、様々な経験が報告されています。私自身夫と共に留学したイギリスで勉強をしながら出産と育児を経験し、また今では育児を終えて母を自宅介護しながら仕事をしていますので、毎号の記事を読みながら、若い頃の自分の経験と重ねたり、介護に取り組んでおられる方々の報告からは大いに励ましをいただきました。これからこのような経験をされる方にも参考になる記事だと思います。

領域から キリスト 教学の

連載「Over Seas」

なんと1号から最新号まで続いている最長寿連載です。いろいろな国の様々な研究機関に留学された方々の報告は各号バラエティに富んだ内容で、とても楽しく読んでいます。留学は行ってみないと分からないことがいろいろと待ち受けていますが、私にとってもその時の学びや経験や苦労はかけがえないものとなり、今の私の土台となっています。この楽しい連載記事は、留学の擬似体験もでき、また留学を考えている人の背中を押してくれる内容です。

おわりに

本誌を読むと、心理学は実証的研究により人間の心や行動についての理解を深め、私たちの認識を新たにしてくれる、専門家のためだけでなく、皆に開かれた学問であると感じます。心理学の豊かな世界へ導いてくれる『心理学ワールド』がこれからも多くの方々へ愛される機関誌でありますようにと願っています。



さの・まさこ 専門はキリスト教史。聖学院大学人間福祉学部を経て現職。博士(アメリカ・ヨーロッパ文化学)。著書に『永遠の言葉』(分担執筆、聖学院大学出版会)ほか。

哲学研究を行う上で、心理学の知見にどのように学ぶかというのは、本質的に重要なことである。そもそも、エドワード・リードが『魂から心へ』^{ソウル マインド}で示唆しているように、現代哲学は、実験心理学のインパクトをどのように受け止めていくのか、その苦闘から生まれたとも言えるし、また、哲学のなかでも「心の哲学」のような領域では、現代心理学で得られた知見抜きではそもそも研究を進めていくこともできないほど、心理学との結びつきを強めている。

翻って、思想史研究ではどうだろう。現代でも多くの哲学研究者は、デカルトであれカントであれ、古典的な哲学者を研究対象に選び、その思想史的読解を進める中で哲学的なテーマを探求するという研究スタイルをとっている。私自身も19世紀から20世紀初頭にかけてフランスで活躍したアンリ・ベルクソン(1859-1941)という哲学者をメインの研究対象として選び研究を行っているが、こうした研究は心理学史と同様あくまで歴史的な関心に導かれた研究であって、現代の心理学との関わりは薄いと思う読者の方もいらっしゃるのではないだろうか。しかし、こうした古典的な哲学史研究を行う哲学研究者にとっても、現代心理学に学ぶことは重要なのだ。そして、そのためのガイドとして『心理学ワールド』はとても有益なガイドを果たしてくれているのである。

歴史的な哲学者は誰でも、その哲学者が生きた時代の科学と無縁でないが、私が研究するアンリ・ベルクソンという哲学者はとりわけ、同時代の諸科学に敏感だった哲学者である。私が主として研究しているのは、ベルクソンの最後の名著と言われる『道徳と宗教の二源泉』(1932年)という作品で、その名の通り、私たちに人間にとって道徳や宗教はそもそもどのようなものなのかを「閉じたもの」「開いたもの」という独特な二分法に従って分析している。そして、この著作は、当時の心理学の知見が縦横に活かされているのだ。ウィリアム・ジェームズの『宗教的経験の諸相』からの影響は

相模女子大学
人間社会学部 教授

伊東俊彦

顕著だし、フランスにおいてジェームズ的な宗教心理学的アプローチでキリスト教神秘主義者の心理に迫ったアンリ・ドラクロワの業績も参照されている。フロイトと同時期に力動的心理学の研究を行っていたピエール・ジャネは主要な参照軸だ。

私たちは大概、自分の研究対象が大好きだ。だから、対象との距離感を測りかねて、そうした哲学者や彼に影響を与えた研究が今も十全に通用する知見をもたらしてくれると思いがちになる。けれども、研究の進展に伴い、どうしたって乗り越えられたり、異なる角度から見るべき問題も出てくるだろう。そうしたとき、例えば『心理学ワールド』59号(2012年)を開いてみる。そうすると、現在までの宗教心理学研究のトレンドを簡潔に辿れるだけでなく、スピリチュアリティという語の日本独特の含意を教えられたりする。そうして、今から100年も前の思想的所産から何を汲むべきで、何は距離感を持って読むべきか、その感覚を与えられるのである。

こうしたことも、『心理学ワールド』が多様な切り口から現代心理学で扱われているテーマを紹介してくれているからできることだ。98号の特集「『正しさ』を考える」(2022年)は行為の原因と道徳的理由との関係を教えてくれるが、これはベルクソンの道徳論を読むのに示唆を与えてくれるものだし、93号の小特集「変化への抵抗」(2021年)を読みながら、ベルクソンが論じた「閉じた社会」の特徴に改めて思いを致すこともできる。こうして私は、現代心理学の現場を窺い知ることのできる『心理学ワールド』を開くことで、科学と切り結びながら展開されてきた思想史の所産の意味を改めて考えさせられるのである。

哲学の領域から



いとう・としひこ 専門は哲学、倫理学、社会思想史。博士(文学)。著書に *Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle* (分担執筆, OLMS)。

『心理学ワールド』に初めてふれたのは、66号特集「集める心」（2014年）の原稿を書いたときだった。それまであまり意識していなかったのはうかつだったが、ともかくも特集の着眼点に感心した。以来、ときどきは本誌をフムフムと見ている。最近、考古学の学部2年生が初めてのゼミ発表で、73号「先史時代の右・左」（2016年）をとりあげた。右と左。普遍性のある問題だ。認知考古学者の松本直子さんの執筆とはいえ、初手から心理学方面に書かれたものを見つけてきて論じるとは愉快だ。本誌の影響を感じつつ、以前の受け身の自分を反省した。もっとちゃんと読もう。

物質的な痕跡から過去の人の行動を復元し、人間の理解へと導いていくのが考古学だから、「心」とその仕組みの問題は今後ますます避けて通れないと思う。そして、現代人の行動の出現のような認知進化の問題は、考古学者や人類学者も踏み込んでいくべき課題だ。現代人の「心」と真ん中の研究はもちろんだが、進化という意味では他の種との比較による理解も重要だろう。そんなわけで、例えば進化の隣人に関する本誌の記事にも自然と目がいく。

鹿児島国際大学
国際文化学部 教授

中園 聡

71号「動物の勇気 ― 動物に利他的なヒーローはいるのか?」（2015年）は、タイトルからして引きつけられる。動物、とくに霊長類の利他行動の記事で、実験を通じた説得力のある話が出てくる。チンパンジーは他の個体が要求したら道具を取ってあげられるが、要求がないのにわざわざ取ってあげるようなお節介はしないそうだ。著者の山本真也さんは、飼育下では見られるが普通はしない類人猿の行動について、先日の講演で「できるけどしない」という印象的なフレーズを使っておられた。初期人類はどうだったのだろう。考古学者は、物事の起源や変化を痕跡からたどることに執念を燃やすが、過去のヒト族の潜在的な能力を痕跡から把握するのは難問だ。そういえば、タイの土器作りを調査した際に真似て作ってみたら、もう見ていられないという感じでベテランたちが寄ってきて教えてくれた。人を人

たらしめているそんな積極的な利他行動は、「人とは何か」に迫る鍵の一つだろう。進化的な獲得過程への興味は尽きない。

81号「チンパンジーの絵から芸術の起源を考える」（2018年）も、ワクワクした。「絵を描く心の基盤とはなにか」「芸術する心はなぜ生まれたのか」という深遠な問いへの考察が平易に書いてある。チンパンジーと人間の子どもで「画風」が違うらしい。両者の比較から、言語、「見立ての想像力」、概念化の問題などにふれ、写実的（知覚的）な絵は子どもが描く記号的な絵の延長にはない、と喝破されている。ホモ・サピエンスは、芸術的行動の出現に代表される数万年前の「創造性の爆発」「文化のビッグバン」から写実的な絵画が登場する「文明」まで、気の遠くなるような時間がかかった。そんな人類史や、ヒトの認知・身体・技術の関わりと変化を考える大切な手がかりが芸術といえそうだ。いつか、先史時代の小さな子どもが描いた「頭足人」は発見されるだろうか。

芸術といえば、54号「モナリザの視線」（2011年）のような知覚に関する記事も、私たちに是有用だ。目が追いかけてくるように感じる「モナリザ効果」。巧みな解説もさることながら、広く知覚に関する知見は、過去の人々の考察にあたり立脚できる基盤となる可能性があるだけに、私たちが動向を注視すべきことに改めて気づかされた。現在、モニタ表示など応用技術の展開もあり、博物館展示などでも使えそうだ、などと考えていたら、モナリザ効果は当の『モナリザ』では起きないというショッキング?な論文にも出会えた。心理学の世界へいざなうきっかけ、インターフェースとしての本誌を今後も楽しみたい。

考古学の領域から



なかその・さとる 九州大学博士後期課程、同文学部助手等を経て現職。博士（文学）。著書に『文化情報学事典』（共編、勉誠出版）、『認知考古学とは何か』（共編、青木書店）。

馬という動物を「パートナー」に心理や教育にかかわる実践をしていると、そこに起きる豊かな事実を拾い／に気づき、それを次の実践に活かすということに夢中になってしまう。「実践」ってそういうことなんだとつくづく思う。

さて、残念なことに「特集」や「小特集」の多くは私の「好奇心」を触発しなかった。その内容から、「シンリガクケンキュウシャ」ご自身の自己表出というか、生き活きた姿が感じられない、社会とのつながりがイメージできない、そんなことが理由かもしれない。執筆者の皆さん、ごめんなさい。もちろん「触発」されるかどうかは相対的なことだから、皆さんの内容から大いに「触発される」人もいだろう。だから、これは「私にとって」という但し書き付きである。また、私自身55号に記事「馬との交流が私たちにもたらすもの」(2011年)を書かせていただいている、その内容がどれだけ読者の方々に「触発」したかをさておいてこのようなことを言うのはひどい話でもある。なお、「人を触発しない」ということは、その研究に意味がないとか取り組む必要がないということを全く意味していない。

やまだようこ氏が中谷宇一郎氏を引いて「科学とは『ほんとうかどうか』を問う学問である」とし、「科学にとって最も重要なのは『再現可能性』である」と述べている(51号「新しい質的心理学の方法論を求めて」2010年)。私は「科学とは価値の相対化である」と考えている。これは友人の遺伝学徒、斎藤成也氏(国立遺伝学研究所)が今から40年近く前に放った言葉だ。私なりにこれをいい換えると、「当たり前(絶対)だとしていた事象を対象化し新たな意味に気づく」ということだ。最近本人に確かめたら「え、私そんなこと言いましたか?」って言っていたから、その時の言葉の勢いだったのかもしれない。しかし、私にとってこの言葉は「研究」を行ううえでずっと「鏡」になってきた。塩見昌裕氏の言う「外在化」(98号「ロボットによる触れ合いの外在化に向けて」

2022年)の作業がこれに関連している。これに取り組むことになるきっかけは、「どうして?」や「えっ? それ本当?」「これ(この現象)ってナニ?」といった気づきや疑問である。先頃小学生の皆さんに『「ナンデ?」って思うこと』を聞いてみた。ご想像の通り、本当にたくさん出てきた。そして、「なるほど!!」と気づかされる内容で溢れていた。

話を戻そう。心理学という領域、それは「人(その他の動物)の内的過程と行動現象との関連を科学する」ということになるだろうか。その方法は統計的な手法もあればナラティブな手法もあろう。もっと他にだっているように思うし見つかるかもしれない。

四本裕子氏は「疑似心理学」の蔓延を懸念している(96号「社会における心理学の誤用とどう向き合うか」2022年)が、これは「真性心理学」が「疑似心理学」の説を相対化できていない、言い換えれば「疑似心理学」が「真性心理学」に勝っているのである。平石界氏が98号(裏から読んでも心理学「5%と10%の間で」2022年)で「査読攻撃を躲す技」としての英語表現を紹介している。対象は医学論文だけれど、これは「疑似」が「真性」を装おうとして

いる? 果たしてそうなのか? なぜ、このようなことが起きるのか?

そういえば、池田謙一氏が、「初めは何か、へんだな、と気づいたことをじっくり発酵させてください。直観が先で論理の神様は後からやってきます」ってエールを送っている(97号「ふしぎの国の民主主義の通文化的構図 — 統治の不安概念を育てる」2022年)。直感のずっとあとからやってきた「シンリガク」の制度(規範)に絡めとられてしまったら、「心理学」の未来は暗い。



たきさか・しんいち 東京学芸大学大学院修士課程修了。専門は臨床心理学、教育方法。独立行政法人国際協力機構横浜センター技術顧問を兼任。

領域から ホースセラピーの

日本治療的乗馬協会 理事長
滝坂信一

心理学雑誌に掲載された実験の追試を行ったところ、有意な結果が出たのは36%であった¹。これは驚くべきことなのか、いつも通りなのか。心理学者に「その心理学信じていいですか?」と尋ねたら、どう反応するだろう。物理学者に同様の質問をすると憤慨してしまいそうなこの問いは、68号(2015年)の特集タイトルである。この特集では、「疑わしい研究活動(QRPs)」が話題となったことを受けて、QRPsを紹介するとともに、「信じられる」研究にするための方略が紹介されている。ここでは特集のなかから2本の記事を紹介する。

まず、平石界氏・池田功毅氏「心理学な心理学研究 — Questionable Research Practice」では、心理学の学部生が指導教員と大学院生に研究方法について相談する様子を通じて、QRPsの実情が暴かれている。研究室でよく耳にしそうなやり取りだが、この対話に疑問を抱かず読み進めてしまうと、多重検定、確証バイアス、後知恵バイアスなどの罠にはまることになる。QRPsに陥りやすいか否かを見極める試金石のような記事である。読者には自身がQRPsに陥りやすいかどうかをぜひ試していただきたい。また、業績競争における研究者のジレンマや、QRPsに陥った研究者に必ずしも悪意があるわけではないことなど、昨今の研究環境を諷刺的に描いている。記事では言及されていないが、研究者に悪意がないのは無知ゆえであるから、改善には少なくとも適切な統計教育が必要であろう。

次に、大久保街亜氏「統計的に有意? — 帰無仮説検定でわかること・わからないこと」では、 p 値のみに基づく統計的帰無仮説検定の限界が指摘されたとうえで、効果量、信頼区間、検定力など複数の指標から包括的に検討することが勧められる。一時物議を醸したFacebookの感情伝染実験を具体例としてあげ、読みやすく工夫されている。また、ノウハウだけが流布し

て統計解析の過程がブラックボックス化されたり、有意水準0.05という基準が慣例化されたりして、研究者の思考を停止させて怠惰な精神をつくることも指摘されている。ただし、有意水準0.05には明確な根拠がないと批判的に述べられているが、効果量や検定力も同様であることに注意が必要である。統計学に頼らざるを得ないのは「真理」がわからないからであるが、統計解析法は、すべての前提が正しくても演繹のように100%正しい結論を導き出すことはできず、確率的に結論を評価するしかない点は肝に銘じておくべきである。それと合わせて、QRPsでは前提が正しいとは限らない点も忘れてはならない。また、統計的帰無仮説検定の代わりにベイズ推定を推しているが、代替案にはベイズ推定だけでなく、情報量規準によるモデル選択など多くの選択肢がある。データによる統計モデルの選択や評価として、目的に合わせた統計解析法を選ぶように促すほうがよいだろう。

現代の統計的帰無仮説検定の源流である有意性検定は、約100年前にロナルド・フィッシャーが考案した。フィッシャーは当初から多くの誤用や誤解に注意を促してきたが、残念ながら研究者はいまだに誤用や誤解を繰返し続けている。もちろんフィッシャーだけでなく、その後も誤用や誤解への注意は幾度となく繰返し促されてきた^{2,3}。歴史を振り返ると、研究者のQRPsは常態化しているようである。心理学は行動変容に大いに役立ってきたので、心理学者には研究者がQRPsに陥らないよう行動変容させるプログラムを開発していただきたい。

領域から 科学哲学の

北海道医療大学
リハビリテーション科学部 准教授

森元良太



もりもと・りょうた 博士(哲学)。専門は科学哲学(生物学の哲学、確率論・統計学の哲学)。共著に『生物学の哲学入門』、分担執筆に『ダーウィンと進化論の哲学』(ともに勁草書房)など。

¹ Open Science Collaboration (2015) *Science*, 349, aac4716. ² Morrison, D. E., & Henkel, R. E. (1970) *The significant test controversy*. New Brunswick. [D. E. モリソン・R. E. ヘンケル/内海廉一郎他(訳)(1980)統計的検定は有効か. 粹出版社.] ³ Gigerenzer, G. (2004) *The Journal of Socio-Economics*, 33, 587-606.

社会性発達の文化相対論

内藤美加氏による「心の理論の発達と文化」(88号小特集, 2020年)は、そこから想像の連鎖が始まるという意味でとても面白かったので紹介したい。この小論は、欧米起源の「心の理論」研究が暗黙の前提としてきた人間観、すなわち個人を独立した情報処理(表象操作+意思決定)システムとみなし、他者におけるその動作をメタ表象的に捉えているという考えに、文化相対的な観点から再考を促す。欧米的な見方による「心」はそれほど普遍的なものではなく、それぞれの歴史的・文化的な環境のもとで構成された表現型のひとつに過ぎないという。

たしかに、日本の子どもでは誤信念課題の通過時期が欧米に比べて遅くなることなど、言語や養育スタイルの違いが認知発達にもたらす影響は検討されてきた。しかし、多くの研究では欧米的な人間観を鵜呑みにし、それに基づく十全なメタ表象能力の獲得に向けて、日本の子どもの発達がなぜ遅れてしまうのかという議論に留まっていたように思う。

そのような研究スタンスに対して、内藤小論は再考を促す。個人の行動はその「心」の状態に帰属されるという暗黙の前提をいちど括弧に入れ、他者理解や社会性の発達を文化相対的に捉えなおしてみようと。とくに日本人の人間観、すなわち個人は社会的・自然的な状況との関係性の中で行動しているという「関係性の理論」をベースに、これまで欧米的な「心」を前提としてきた認知能力やコミュニケーション能力に関する議論をほどきなおしてみようと。

状況に埋め込まれた日本人

日本人(日本の言語文化の中で育った人)は、どのような人間観、とくに人の行動の背後にある心の働きに対する想定をもっているのか。ここで想像を膨らませてみたい。

欧米では個人主義、すなわち独立した個人が意思決

定しその責任を負うという考えが、文化や社会制度の根底にある。日本人もそのような個人主義に根ざした法律や規範に則って公的な社会活動を営む一方、個人の「心」は物理的・社会的な状況へのシームレスな拡がり¹をもち、日常的な認識や行動はその影響を大きく受けているのではないか。状況に埋め込まれた日本人は、他者によってアフォードされあう中、互恵的な関係性の中へ無自覚的に埋め込まれているのではないか。

日本人の「心」が明確な境界をもたず環境や状況に浸潤していくのはなぜか。欧米と対照すれば、一神教に対するアニミズムが思い当たる。自然を征服しよ

うとするのではなく、自然から飢えも寒も与えられ、その中に(靈性を感じつつ)包摂されて生きていく。日本人の多くは(自称)無宗教と言われるが、言語や風俗には諸宗教が織り込まれており、その基層にはアニミズム的な世界観が沈澱しているのではないか。山川草木に同質性を感じ、自分をとりまく集団にも無自覚的な同質化、すなわち「心」の境界の拡張をしているのではないか。

認知発達の「ほどきなおし」へ

子どもの認知発達は、何らかの普遍的な情報処理メカニズムによって駆動されるのだろうが、個別の歴史的・文化的な状況の中で展開され、そこで暗黙的に共有されている世界観・人間観を内化していくプロセスと言える。「心の理論」として検討されてきた他者理解の能力は、こうして獲得された人間観の顕れであろう。ゆえに、その普遍性と個別性を切り分け、養育環境・発達プロセス・獲得された能力などを文化相対的に捉えなおすことが求められている。

領域から ロボティクスの 認知発達

東北大学大学院
教育学研究科 教授

小嶋秀樹



こじま・ひでき 博士(工学)。専門は認知発達ロボティクス、療育支援技術など。著書に『ロボットの悲しみ』(共著、新曜社)、『〈自閉症学〉のすすめ』(分担執筆、ミネルヴァ書房)など。

¹ 河野哲也(2005) 環境に広がる心。勁草書房。

これまで私は、医師と心理師双方の世界に身を置いてきたため、『心理学ワールド』に取り上げられる話題の中でも、脳科学、認知神経科学、近未来的な社会実装に関心が向かうことが多い。そのような目で振り返ってみると、88号（2020年）、99号（2022年）で取り上げられたバーチャルリアリティ（VR）関係の特集記事が特に面白く感じた。

コロナ禍になりオンラインカウンセリングの実施が一般化したのが、私が院長（非常勤）を務めるクリニックでも、3年前から心理スタッフによる全てのカウンセリングをZoomで行うこととし、これまでに98例（うち10例は対面から移行）のケースを導入してきた。その過程で、想像したよりもずっとうまくケースが進むことが分かり、これはどういうことかと考えている際に、VR関連の記事を読むことがあり、得心する部分があった。そもそもZoomでやり取りを行うこと自体が、88号「身の回りにあるバーチャルリアリティ」にある通り、拡張現実（AR）に相当し、「現実空間と仮想空間の融合、仮想空間の共有、操作者の能力増強」を可能にしているのではないかと思います。例えば、Zoomを使った際に、どうして共感が成立するのかと言えば、相手を理解したりコミュニケーションを取ったりするのに、視覚、聴覚以外に、身体感覚を使っているからだと考えられる。これは、88号「バーチャルリアリティと感情」に述べられている通り、「他者の身体反応や感情の表出を感じ取ることで、自身も同じ感情を抱いてしまう『情動感染』と呼ばれる現象」が起こるからであり、経験を積むことで身体感覚の増強が可能になり、共感能力も増強されるのかもしれない。そして、自分の顔を画像として表示したり、対話相手の顔を見せる場合に、画像処理をして少しでも笑顔にしたり、悲しい顔にしたりすることによって、感情、モチベーション、意思決定などが影響を受けることが報告されているというくだりを読むと、Zoomでカウンセリングをする際にもリアルタイムで画像処理をすることで、介入効果が上がりやす

早稲田大学
人間科学学術院 教授
熊野宏昭

くなることも十分にあるのではないかと。そのようなことを考えていたところ、99号「悩みに対処するVRセルフカウンセリング」という記事で、自分と他者のアバターを使って、セルフカウンセリングをすることが可能であり、相手役をフロイトや親密な他者にすることによって効果がどう変わるかを調べた研究成果が報告されていた。その結果としては、フロイトでも親密他者でも悩みの苦痛度は下がるが、不安症状は親密他者を演じた場合の方が低下が大きいということであり、ここまで来ると、相手が他者でなくても効果が出るほどに、「操作者の能力増強」が実現されるのかと驚きを禁じ得ない。

そこで、次に関心が広がるのが、自分と他者の関係に、VRがどう関わっていくかであるが、その点に関しては、99号「バーチャルリアリティと変性意識体験」に、身体所有感や運動主体感に関わる実験結果が報告されていた。さらには、ニューラルネットワークが学習の結果獲得する特徴空間と「幻覚」や「夢」を対比させつつ、この特徴空間のパノラマ映像をVR上に実装し体験させることで、幻覚剤であるシロシビン摂取後の主観報告と類似する視覚の変容などの体験が得られたことが報告されており、「自分にとっての現実」とは何かの検討を深める必要性が指摘されていたのである。そして、88号「身の回りにあるバーチャルリアリティ」で提唱されている「言語という記号情報ではなく、対象や環境そのものを提示して他者とコミュニケーションを取る」のがVRの本質だとするならば、将来的には、上記のようなまさに「拡張された現実」を提供することを含む、想定外のカウンセリング方法が実現されていくことになるのかもしれないと思うのである。

領域から 臨床心理学の



くまの・ひろあき 東京大学医学部卒業、博士（医学）。2009年より現職。行動医学、マインドフルネスが専門。著書に『瞑想と意識の探求』（サンガ新社）。

私は現在もうすぐ3歳になる娘と0歳の息子を育てている。本原稿の依頼をいただいたのも、息子を出産して3日後のことだった。子どもを持つと常に脳内が子どものことで埋め尽くされ、子どもや子育てに関する心理学研究に興味をわく。特に気になるのは、自分の研究とも関係のある「言語」と「認知」の発達である。

娘が1歳半を過ぎ、ある程度コミュニケーションがとれるようになってくると、「昨日はどこに行ったか」「保育園でどのような遊びをしたか」といった会話ができるようになった。2歳を過ぎた頃からは、実際に自分が体験した出来事を親に伝えることも増えた。3歳以前の記憶は成長後ほとんど自伝的記憶（時間や文脈の情報に加えてさまざまな感情も伴った『思い出』の記憶）として想起されない（幼児期健忘）と言われているし、「どうせ忘れてしまうからいろいろ体験させても意味がない」といった話も聞く。それでも、娘ははっきりと自分の体験を「思い出」として語っているようにみえる。

子どもの記憶について、『心理学ワールド』の記事はないかと探してみると、上原泉先生の「記憶を追う — 幼少期からの縦断研究」（62号、2013年）に行き当たった。この記事では、1回2〜3時間かかる調査を数か月に一度、5〜20年という長期にわたって行った縦断研究が紹介されている。長くて1時間の実験ばかりやっている自分には途方もなく大変な印象を受けるが、労力が大きい分得られた成果も興味深い。記事によると、幼児期健忘にはことばの発達が関係しているらしい。2歳を過ぎて過去形での語りが見られ、4歳頃に記憶語の自発的使用へと発達し、3〜4歳にかけて「思い出」の形成がなされるそう。現在娘が語る記憶が、単なる過去形での語りですぐに想起されなくなるのか、さまざまな感情や懐かしさに彩られた「思い出」なのか、これからも観察していきたい。

もう一つ興味深かったのが、榊原知美先生の「子どもの数理解と文化」（88号、2020年）という記事である。娘は入浴中に数をかぞえるなど、数に関すること

ばが頻繁に出る。ごくたまに正しく足し算の答えを出せたり、正確に1から10まで数えたりすることはあるが、まだまだおぼつかない印象である。彼女の数理解は、この先どのように進むのだろうか。記事によると、2歳前後で数詞を用いて数を数えようとしはじめ、およそ3歳半頃には数を数えることができるようになるそう。なるほど。ちかごろ娘は副菜を取り分ける際に自分の皿と他の皿の間で量のかたよがりがあると不服を申し立てたり、「りんごを2つちょうだい」と言ったり、数や量の感覚に敏感になってきた印象があったが、程よく発達しているということなのだろう。また、子どもの数理解は子どもを取り巻く学びの文化や母語に影響を受ける

らしい。具体的には、日本語などの十進法に基づいた表記に従う数詞表現が子どもの数理解を容易にし、幼児期の数詞の獲得や就学後の位取りの概念の獲得などにも影響するそう。

以上、最近の自分の興味に沿った記事2つをご紹介します。これらの記事の共通点は、子どもの記憶や数理解といった認知発達に、言語理解や言語発達が関係していることを指摘している点である。私はこれまで、言語陰蔽効果という、顔やモノの視覚的記憶を言語で表現す

ることが記憶に悪影響を及ぼす現象を切り口に、言語的機能が自己認知や記憶のありかたに及ぼす影響を研究してきた。やはり「言語」は面白い。『心理学ワールド』に触れることで、日常生活で感じる些細な疑問が解消するだけでなく、子育てに追われる中で錆つきかけていた研究への意欲も取り戻すことができた。この場を借りてお礼を言いたいと思う。

領域から 認知心理学の

株式会社アイデアラボ
コンサルティング事業部 研究員

波多野 文



はたの・あや 博士（心理学）。京都大学大学院教育学研究科特別研究員などを経て、2021年より現職。高知工科大学（情報学群）客員研究員を兼任。専門は認知心理学。

テキストマイニングで『心理学ワールド』を探る

目白大学心理学部 准教授

財津 亘

1998年『心理学ワールド』創刊より早四半世紀、この間日本を取り巻く環境も劇的な変化を遂げている。インターネットやスマートフォンの普及によって世界がネットワークでつながるとともに、2000年代以降は第三次人工知能ブームが到来し、Society 4.0（情報社会）から新たなSociety 5.0に向かいつつある。また、2011年の東日本大震災は日本に大きな爪痕を残したほか、2019年には公認心理師資格が誕生するなど、心理学界にとっても大きな転換期をむかえたといえる。『心理学ワールド』の内容選定は編集委員によるが、もしかすると刻々と変化する現代社会や心理学の“いま”が『心理学ワールド』に反映されているかもしれない。

そこで、今回は50号刊行記念出版以降の最近10数年の間に発刊した『心理学ワールド』内の「特別企画」「特集」「小特集」を対象に、テキストマイニングの一手法であるトピックモデルを用いて、この間に取り上げられた主題についてみていくこととしたい。

『心理学ワールド』を俯瞰する

分析対象とする51号（2010年）から100号（2023年）を概観すると、「古い」や「うそ・ウソ・嘘」「共生時代の文化と心」「暴力」「数から算数へ」など多岐にわたっており、バラエティに富んだ記事で構成されていることがわかる。分析該当の記事は、記事数で452、執筆者にいたっては485名にのぼっていた（冒頭の編集委員の挨拶文を含む）。また、本分析では各記事の執筆者紹介や図表、引用文献部分を除いたが、その文字数を確認したところ、1,384,703字にも達していた。

テキストマイニングとトピックモデル

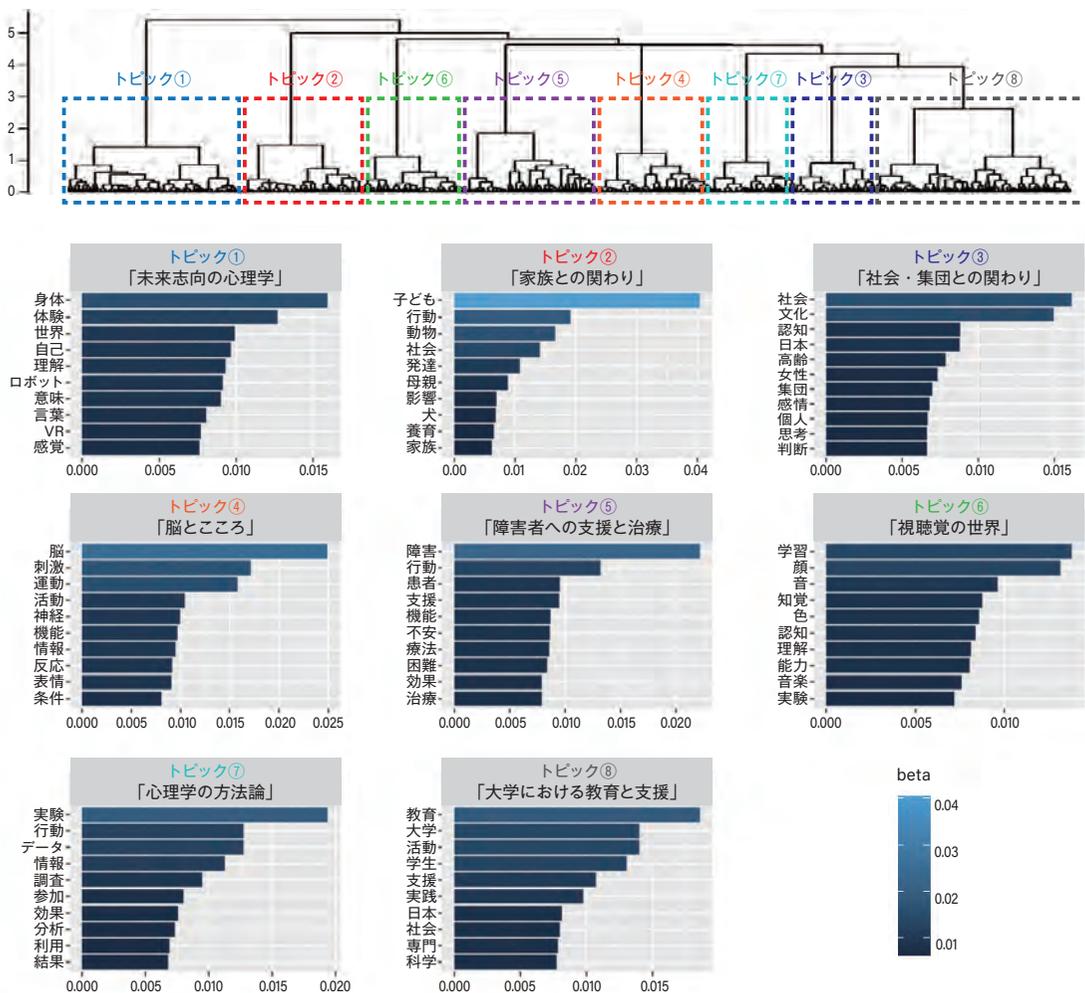
今回はテキストマイニングを用いて最近の『心理学

ワールド』がどのようなトピックで構成されているか分類を試みる。テキストマイニングとは、テキストと呼ばれる文章情報に関する統計解析手法である。近年のAI研究や自然言語処理領域では、深層学習（GPTシリーズやBERT¹）が話題の中心であるが、本分析ではより理解のしやすいトピックモデル、中でもLDA（Latent Dirichlet Allocation, 潜在的ディリクレ配分法）を用いる²。LDAは、ディリクレ分布から「経済」や「芸能」「スポーツ」といったトピックが生成され、さらにはそれらの潜在的なトピックから単語が生成されることを想定した確率モデルの一種である。文書内の単語の生起頻度を基にしたベイズ推定によって、どのトピックにどの単語が分類されるかを確率で求めることができる。教師なし分類の代表であるクラスター分析では、同一単語が異なるクラスターに属することはできないが、LDAでは同一単語でも異なるトピックに属することが許容されるソフトクラスタリングが特徴である。

LDAによるトピックの探索

前述の452記事（1,384,703字）を対象にLDAを実施した結果が図1の下図である（「心理学」など頻出するが特徴的ではない単語等は除外し、トピック数は8を採択）。棒グラフの確率は、各トピックにおける各単語の生成確率を示しており、その内容からトピックを解釈・命名した。なお、トピック番号に意味はない。各トピック内において、各単語の生成確率の合計は近似的に1となるため、分析対象の文字数が多い場合は相対的に生成確率が小さくなる。図1の上図に、全記事の各トピックに属する確率について階層クラスタ分析（ワード法、ユークリッド距離）を行った結果（デンドログラム）を示す。

図1 LDAによるトピックの算出結果および階層的クラスター分析によるトピック間比較
 下端に記載の数値は、各トピックにおける各単語の生成確率を示している。



トピック①「未来志向の心理学」

一つめのトピックを概観すると、「身体」「体験」「世界」「感覚」に加えて、「ロボット」「VR（バーチャルリアリティ）」が際立った特徴となっている。「VR」については、心理学はもとより、情報工学系の先生方による記事が多く、「ロボット」については、主に情報工学系の先生方による、人とロボットとの関わり「ヒューマン・ロボット・インタラクション」の記事が多い。20世紀にはみられなかった新たな社会との関わりを心理学的視点から言及したトピックといえる。

トピック②「家族との関わり」

二つめのトピックに着目すると、「子ども」や「母親」

といった単語がみられ、「発達心理学」や「家族心理学」領域が関与する主題に見受けられる。加えて、「動物」「犬」が含まれている。これは、特集「動物と暮らす」「動物との絆」「動物との触れ合いと私たちの心と生活」のタイトルどおり、ひとと動物、特にコンパニオン・アニマルなど広義な家族との関わりについてのトピックであると解釈できそうである。

トピック③「社会・集団との関わり」

三つめのトピックは、トピック②の「家族」から離れ、同僚や友人などより広範囲な人々との社会的な生活、そしてその中の個人の認知に関わるトピックと解釈できそうである。コンボイモデル³でいえば、円中心の

「家族」からより円外に位置した内容ともいえる。

トピック④「脳とこころ」

このトピックの単語群を概観すると、「脳科学」「神経・生理心理学」領域に深く関わりがありそうである。73号と75号では「脳科学と心理学」と題して特集が組まれているが、「刺激」「条件」という単語が垣間見え、「脳」の構造というよりは、視覚や聴覚、味覚における刺激と脳の機能の関係に関するトピックのようである。

トピック⑤「障害者への支援と治療」

本トピックにみられた「障害」について元記事を確認すると、「発達障害」が圧倒的に多く近年の発達障害に対する関心の高さがうかがえる。一方、「患者」という語に関しては「パーキンソン病」「認知症」「うつ病」「がん」「薬物依存」「社交不安障害 (SAD)」など多様な疾患との関連を示唆したことから、他のトピックに比べると、支援や援助を業務とする公認心理師にとって最も関連深いトピックといえる。

トピック⑥「視聴覚の世界」

トップに「学習」が位置しているが、『心理学ワールド』全体を見渡すと、「深層学習」「強化学習」「機械学習」など人工知能系の話題や「学習障害」などが多かった。どちらかというと、本トピックは、知覚・認知の中でも「顔」「色」「音」の視覚・聴覚刺激をメインとした実験に関するトピックが妥当であろう。また、元記事を確認すると、カラスやネコ、馬といった動物に顔刺激を提示する実験が散見された。

トピック⑦「心理学の方法論」

前述までのトピックとは内容がガラリと変わり、「実験」「調査」「データ」「分析」といった単語がみられる。このことから明らかに研究法の主題となっているのがわかる。研究法には、観察法や面接法といったものもあるが、実験法と調査法が現代心理学を支えていることを示唆している。中でも、「実験」はトピック内で最上位に位置している。因果関係の検証における王道と呼べるRCT (Randomized Controlled Trial) は心理学においても高い質のエビデンスを支えるゴールドスタンダードということであろう。研究法に絡んで、

ここ最近巻では「因果革命」や「統計的因果推論」が話題となっている。調査データの分析からは「相関関係」は把握できても「因果」に言及はできないというのが従来のセオリーであったが、前述の手法によって調査データから因果検証が可能となってきている⁴。心理学では「因果革命」の波はあまりみられないが、介入が困難な臨床現場等に適用できうるため、今後は本トピックに「因果」などが上位にランクするかもしれない。

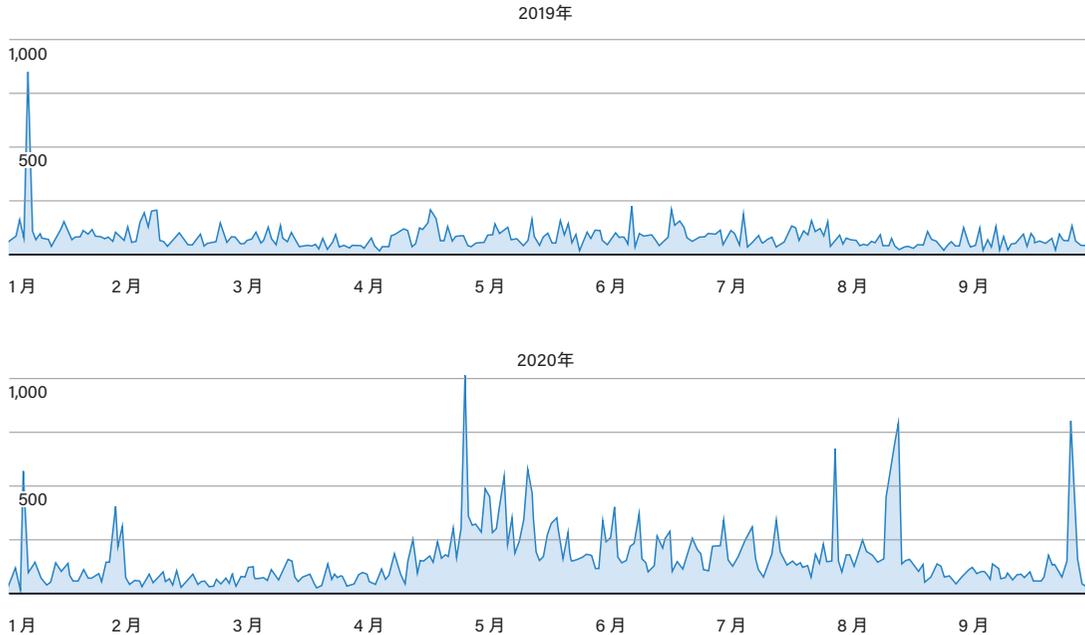
トピック⑧「大学における教育と支援」

最後のトピックには「教育」をはじめ、「大学」「学生」「支援」といった単語が含まれている。元記事によると、初年次教育やキャリア教育、キャリア支援、学生相談、発達障害を持つ学生への支援といった内容が散見される。近年大学進学率は右肩上がりとなっており、『心理学ワールド』創刊の1998年当時の大学進学率が30%台半ばであったのに対して、2022年は56.6%に達しており、過去最高値を更新している⁵。そのため、多様な学生やニーズに応える役割を大学にはより一層求められていることがうかがえる。それを示すかのように、『心理学ワールド』の48号 (2010年) 以前に本トピックを含む記事はみられない。

*

以上を俯瞰すると、「発達心理学」「社会・集団・家族心理学」「知覚・認知心理学」「心理学研究法」といった従来のトピックに加えて、時代背景を反映した内容が盛り込まれてきたことがわかる。加えて、図1の階層的クラスター分析で得られたデンドログラムによると、トピック⑧の「大学における教育と支援」を中心に他のトピックが順々に関連するようにクラスターを形成している。「家族」や「障害者」のトピックが比較的外側に位置したのは、近年公認心理師が誕生したことと関係するかもしれない。一方、トピック①の「未来志向の心理学」は最も外側に位置し、従来の心理学と一線を画しており、AI研究など最先端の異なる領域が心理学領域にも参入されてきた経緯がうかがえる。

図2 『心理学ワールド』のサイトへのアクセス数(2019年, 2020年)



『心理学ワールド』アクセス数解析

最後に、ここ数年間における『心理学ワールド』のサイトへのアクセス数を参考までにみていくこととしたい。図2は2019年と2020年の同サイトへのアクセス数である。このアクセス数は、訪問回数であるため、同一人物が複数回アクセスするとその回数分可算される数値であるが、2019年の総アクセス数が27,526に対して同年の総訪問者数でみると15,090となっていた。また、2020年では総アクセス数が45,590、総訪問者数が23,061となっていたことから、およそ総アクセス数の半数程度が訪問者数と推測できる。そこで図2を確認してみると、2019年のアクセス数が横ばいで推移していたものが(2018年も同様の傾向であった)、2020年4月を境にアクセス数が急上昇している。これは新型コロナウイルスの感染が日本全国に広まりはじめ、大学において遠隔授業を余儀なくされた時期と一致する。これはあくまで推測に過ぎないが、遠隔授業の資料として『心理学ワールド』が活用されたことが推察される。

おわりに

以上、『心理学ワールド』は時代に即したさまざまなトピックを配信しており、今後も日本の心理学を盛り上げる資料として期待される。中でも、AI研究の潮流は無視できそうもない。第1次・第2次AIブームでは、心理学分野の「思考・推論」や「知識・概念」と関連が深かった。また、現在の第3次AIブームにおけるCNN(画像に関わる)やLSTM(「長期・短期記憶」システム)、DQN(深層強化学習)といったAI機能は、それぞれ「知覚」「記憶」「学習」と関係深い。かつて認知心理学が情報工学に影響を受けて発展したのと同様、心理学も変革の真ただ中なのかもしれない。今後の動向が楽しみである。



ざいつ・わたる 博士(文学)。富山県警察本部刑事部科学捜査研究所主任研究官を経て現職。専門は犯罪心理学、捜査心理学。著書に『犯罪捜査のためのテキストマイニング』(単著、共立出版)など。

1 Rothman, D., & Gulli, A. (2022) *Transformers for natural language processing*. Packt Publishing. 2 岩田具治 (2015) トピックモデル. 講談社. 3 Kahn, R. L., & Antonucci, T. C. (1980) Convoys over the life course: Attachment, roles, and social support. In P. B. Baltes & O. G. Brim (Eds.), *Life-span development and behavior* (pp.253-286). Academic Press. 4 パール, J.・マッケンジー, D. (2022) 因果推論の科学(夏目大, 訳). 文藝春秋. 5 文部科学省 (2022) 報道発表 令和4年度学校基本調査(確定値)について公表します. https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt_chousa01-000024177_001.pdf *COI:本記事に関連して開示すべき利益相反はない。

広報誌としての『心理学ワールド』

— 「社内報」および「社外報」として

87号～95号 編集委員長

同志社大学心理学部 教授

青山謙二郎

新型コロナウイルスの感染拡大が生じたのは『心理学ワールド』編集委員長の任期のちょうど中頃でした。コロナ禍で編集の仕事を進める中で、広報誌としての本誌の役割について考え込んでしまいました。

編集委員長の仕事は気軽に引き受けました。編集委員は以前に務めたことがあったのですが随分以前のことであり、編集委員長の役目が回ってきたときには具体的にどのように編集していたのかほとんど忘れていました。ただ漠然と「仲良く編集する楽しい委員会だった」とだけ記憶していました。幸いなことに編集委員の半数は2期目の皆さんで編集の実務に慣れており頼もしく、新しく編集委員になってくださった皆さんも活発にアイデアを出してくださったので、委員長の仕事は楽でした。会議の司会をして、原稿の確認をただけでした。原稿の確認は、出版前に新しい原稿を読むことができ、トクな気分になる楽しい作業でした。しかし、他のあらゆることと同様に、2020年の春先から状況が変わりました。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、編集委員会でも困難な状況において何ができるかが議論されました。その結果、過去の記事の中からコロナ禍において一般の人にも有益な記事を選んで、それらを紹介する特設ページをホームページ上に設けることになりました。そのための記事を選ぶ作業の中で考え込んでしまったのが、本誌の位置づけです。『心理学ワールド』は日本心理学会において広報誌として位置づけられています。ただし、誰に対する広報かといえば、学会の会員と認定心理士の方々を主なターゲットになっていたと思います。つまり、「社内報」的な広報誌でした。そのため、記事は心理学について少なくとも学部卒業程度の知識を有していることを前提に書かれているものが多く、それ以外の一般の方々を読むには難しい記事がほとんどだと感じました。

日本心理学会の社会に対する責任を考えると、「社外報」的な広報も重要なことは明らかです。そのため、本誌内のいくつかのコーナーを、日本心理学会員以外の方々を読んでも理解しやすいものに変更することにしました。何回もの編集委員会での議論を経て、97号(2022年)から新しく誕生したコーナーが「あなたの周りの心理学」「Psychology for U-18 高校生に伝えたい○○の心理学」です。前者では日常的で一般の人々にとって興味深いトピックに関する心理学的な知見をわかりやすく紹介することを目的としています。後者はその名前の通り高校生に読んでもらうことを目的としたコーナーです。ちょうど、2022年度からの学習指導要領の改訂により、公民科「倫理」の中に心理学の内容が今まで以上に導入されたことに合わせての開始となりました。また同時期にスタートした「Keeping fresh eyes 心理学研究最先端」もこの流れの中で「日本心理学会若手の会」の皆さんに依頼して誕生したコーナーです。以前からあった「私の出前授業」も、こしばらくは日本心理学会が各地で開催していた「高校生のための心理学講座」の報告が続いていたのですが、高校への出前授業が得意な先生方による実際の出前授業の紹介に戻りました。このコーナーも心理学の面白さをわかりやすく伝える役割を果たしてくれると思います。これらの新コーナーの大筋だけ決めて、後は片山現編集委員長にお任せしました。

自分が編集委員長でなくなってからも『心理学ワールド』は楽しみにしています。中でもこれらの新しいコーナーは真っ先に読んでいます。これはいいな、これは楽しいな、という記事がたくさんあります。せっかくの楽しく有益な記事ですので、ぜひ高校生をはじめ心理学に興味をもつ多くの「社外」の皆さんに届いてほしいと思います。



あおやま・けんじろう 専門は学習心理学、行動分析学、食行動の心理学。2009年より現職。近著(分担執筆)に『ようこそ、心理学部へ』(ちくまプリマー新書)。

編集委員会が楽しかった

71号～86号編集委員・副委員長

専修大学人間科学部 教授

大久保街亜

会議が楽しい。そんなことは滅多にない。たいていの会議は決定事項の伝達や意思決定のアリバイづくりが目的だ。それが楽しい人は変人である（と私は思う）。ただし、心理学ワールドの編集委員会は楽しかった。3か月に一度、本郷にある日本心理学会事務局の会議室に委員が集まり、ざっくばらんに意見を出し合った。特集や小特集については、担当の委員が原案を出し、それを軸に企画会議を進めるのが通例だった。ただ、心理学ワールドの編集委員会では、出された原案にさして意見もなく承認といったよくある会議進行がほとんどなかった。少なくとも私が委員だったときにはなかったと思う。

特集「暴力」（77号、2017年）について議論した委員会を例にあげよう。最初に私が参加した委員会なので印象に残っている。小森政嗣さん（編集委員）が担当委員で、進化と文化という心理学の屋台骨を支える視点を柱に暴力に関する最新の知見を紹介するという企画案だった。進化と文化それぞれについて、霊長類の子殺しをテーマに古市剛史さん、名誉の文化をテーマに石井敬子さんが記事を書いた。名前だけで読みたいくなる人選だ。さらに「現代的なのがいいよね」「このテーマならこの人はどうか」などさまざまな提案や意見が他の委員から出された。最終的にTwitterの投稿分析で差別や偏見の問題に取り組んでいた高史明さん、スポーツ指導における体罰について意見発信をしていた世界選手権の陸上競技メダリスト、為末大さんが特集に名を連ねた。こんな感じで、議論を重ね企画は魅力的に肉付けされていった。積極的、生産的に話しあうさまに少し私は驚いた。

意見が活発に出る会議は、荒れたり、紛糾したりすることもある。キツイ言葉が飛び交うこともある。イヤなものだ。だが、心理学ワールドの編集委員会ですういうことはなかった。当時の委員長、川口潤さんや担当常務理事の宮谷真人さんと原田悦子さんの人柄によ

るものかもしれない。また、歴代の委員の皆さんが引き継いできた空気感もあるかもしれない。ともかく風通しがよく、明るい雰囲気の中自由闊達にワイワイガヤガヤと話し合いができた。

そんな雰囲気の中、私が委員だった時期にはじまった企画に「こころの測り方」がある。きっかけは、手塚洋介さん（編集委員）と川口さんが委員会終わりの電車でした世間話だったと聞いている。「新しい統計手法や測定法がたくさん出てきている」という話になり、そういったものをわかりやすく手短かに伝えるコーナーを心理学ワールドにも作ろうということになったらしい。そう川口さんから聞いた。

当時の編集委員のなかでは、大久保が統計などに詳しいだろうという話になり、私がこのコーナーの担当となった。ただ、丸投げされたわけではなく、川口さんから「こういうのが知りたいんだよね」とお題のリストを委員会で提示された。他の委員もいろいろ意見を出し、あつという間にしばらくは困らないくらいの企画案が集まった。当初から話に出ていた「ベイズ統計学（87号、2019年）」「サンプルサイズの決め方（85号、2019年）」「コルチゾールからストレスを知る」（86号、2019年）や「ミリ波レーダによる非接触計測」（92号、2021年）など、最先端の薬学的、工学的測定までが取り上げられた。このような多岐にわたるトピックが、一つのコーナーで取り上げられるのは委員会メンバーの力が結集したお陰である。風通しのよい、楽しい雰囲気の中で行われる生産的議論の産物だと言えるだろう。

雑にまとめると、心理学ワールドの編集委員会はとても楽しかった。その楽しかった雰囲気が、誌面にもよく現れていると思う。読者の皆様には、ウェブサイトのバックナンバーをあさって、ぜひいろいろ読んでいただきたい。



おおく・まちあ 専門は認知心理学。博士（心理学）。著書に『伝えるための心理統計』（共著、勁草書房）『認知心理学：知のアーキテクチャを探る』（共著、有斐閣）など。

おトクな誌面を目指して

— 小特集「マンガを科学する」を例に

79号～95号 編集委員

早稲田大学文学学術院 教授

清水由紀

『心理学ワールド』の編集委員を4年間務めた感想は、とにかくおトクな委員であったというものである。3か月に一度の編集委員会では、心理学の各領域の専門家が一堂に会して「今面白いこと」を次々と話題にするので、旬なトピックのエキスを一気に吸収しているような感覚があった。そしてなんとと言っても、委員として特集を企画する際に、とっておきのテーマについて、とっておきの方々に執筆してもらえるという、贅沢な経験ができるのが醍醐味であった。

そして湧き上がった疑問は「これは編集委員が一番おトクなのでは?」というものである。ちゃんと読者におトクだと思ってもらえているだろうか?……という心配から、委員として感じた面白さをいかに誌面に反映させるかが次第に目標になった。それが実際に達成できたかについては自信はないが、それはともかく、作り手側としてどう読み手にとってのおトク感を意識したかの一例として、企画した96号小特集「マンガを科学する」(2022年)を振り返ってみたい。

マンガは今や日本の全出版物の約3分の1を占め、海外の人々が日本に興味を持つきっかけの一つである。そのような身近でかつ国際的なマンガという存在を、どう科学的な研究に乗せるのかというテーマは、心理学会員のみならず、中高生を含めた幅広い層に響くのではないかと考えた。さらにマンガは、学際研究の題材として研究者の観点からも面白い。家島明彦氏がまとめたように、近年マンガは独特なグラフィック表現形式をとるビジュアル言語と見なされ、その構造や読解過程に関して学際研究が盛んになされるようになっていく。その学際性を際立たせるため、心理学、認知科学、言語学、漫画家と多方面の方々にご執筆いただいた。

原稿が上がってきて、「面白い!」と唸ったのは、複数の著者が「視点」を中心テーマとして提示してきたことであった。例えば発達心理学を専門とする中澤潤氏

は、マンガリテラシーが高い子どもと低い子どもの眼球運動を比較し、効率的な読みは視線の動きの違いに現れることを示した。一方で認知言語学を専門とする出原健一氏は、言語学で自由間接話法と呼ばれる構造が、マンガでは、例えば登場人物Aの視点が描かれているにもかかわらず、Aの後ろ姿が映りこんでいるという「身体離脱ショット」に見られると解説した。さらに漫画家のすがやみつる氏からは、このような多重視点は、キャラクターを印象づけるための苦肉の策として用いられるようになったことが述べられた。例えば、すがや氏の代表作『ゲームセンターあらし』では、主人公が見ているゲーム画面、周囲の人々が見ている主人公の姿、主人公の心の中、という幾重もの視点が一つのコマに収められている。このような複雑で現実にはあり得ない多重視点が、マンガの中では成り立ち、小学生にもすんなり理解されるのである。一読者として、この8ページの凝縮された小特集を読んでみて、このユニークな視点構造が、マンガの世界的な人気の一つの要因になっているのではないかとこの仮説が生まれた。なお、今回はマンガがテーマだったので、(特にマンガ作家のすがや氏には)実際のマンガのコマを原稿に含めていただけるようお願いした。例示されたコマには視点の多重性が実に効果的に示されているので、是非誌面で確認していただきたい。

さて、例えばマンガの研究について知りたくなり、検索すれば、ウェブ版『心理学ワールド』の上記の特集にたどり着く。たった数ページの小特集記事を読んだら、背景と最新の研究を知ることができ、根拠に基づいた仮説を導き出すことができる。やっぱり、『心理学ワールド』は読み手にとってもおトクではないか。企画後の(大いに自己満足的な)結論はやはりこれであった。幅広い方々に、是非積極的に活用していただきたいと心から願っている。



しみず・ゆき 博士(人文科学)。2020年より現職。専門は発達心理学。編著に『学校と子ども理解の心理学』『他者とかわる心の発達心理学』(ともに金子書房)など。

こころの探究は分野の垣根を超える

— 美大生も楽しむ心理学ワールド

若手の会から

北里大学医療衛生学部視覚機能療法学 特別研究員

宮坂真紀子

これまで『心理学ワールド』の一読者に過ぎなかった私も、光栄なことに若手の会幹事の在任中に何度か執筆の機会をいただきました。100号（2023年）では医療・福祉におけるアート&デザインについて紹介しましたが、心理学をご専門とされる皆様にご紹介いただく貴重な機会と思うと、嬉しい気持ちと同時にしっかりと伝えなくてはと身が引き締まる思いでした。私の研究は心理学の分野としては王道ではないものの、芸術を活用して肉体的・精神的・社会的な健康を支える環境を創造するために日々邁進しています。

さて、冒頭で記したように、普段は読者として楽しませていただいているのですが、母校の美術大学で授業をする際には学生にも本誌を紹介しています。ご存知の方も多いと思いますが、心理学の研究はアートやデザインの領域と深い関わりがあります。知覚では騙し絵のエッシャーや錯視の北岡明佳先生、時代を遡っていけば色彩学の理論を作品で検証した点描画のスーラ、無意識に着目したダリ、デザインの分野では認知心理学のノーマンといったように枚挙にいとまがありません。

日常的に創作活動に取り組む美大の学生も普通の大学生ですので、何もないところから突然思い立って作品を作り始めるということはありません。これまで生きてきた中で経験したことや感じたこと、ずっと思ってきたことなど様々なものをベースとして創作に繋げています。それゆえに、アート作品をはじめ、キャラクターデザインやプロダクトデザインでも作者の考え方・生き方が色濃く表れていると感じるわけです。

そもそも、アートやデザインの世界は長い歴史の中で政治経済や科学技術の進歩とともに歩んできました。今日においても名作と言われる作品には、人間の本质とは何かを私たちに問いかけるものが数多くあります。そのように時代や国境を越えて人々のこころに届く作

品は、様々な時代背景の中で起きた変化や、戦争と平和といった普遍的なテーマに向き合い、答えを模索し続けた形跡の一つでもあります。すなわち、アーティストやデザイナーは、自分自身を含めて、人の心理や行動と向き合い、時には目を逸らさずに見つめる姿勢がなくては成り立たない仕事であるため、人間に対して一際強い関心をもつ人たちともいえます。したがって、扱うテーマも多種多様で、深刻な社会問題からユーモラスな内容までありとあらゆるものが作品となり私達を楽しませてくれています。

現代のアーティストやデザイナーが扱うテーマの多様化は、単なる美しさではなく、人のこころと行動に着目していることの表れでもあります。誰もが発信者になれるこのような時代だからこそ、創作活動の原点をしっかりと見据え、オリジナリティを確立する力が一層求められています。アートも心理学も分野の垣根を超えて最新の研究動向を知って広い視野をもつことは、今を知り、未来を創ることに他なりません。

『心理学ワールド』はオンラインで公開してくれていることもあり学生が気軽にアクセスできるのはもちろんですが、同世代の人たちがどのような研究をしているのかということを知るとても良い機会になっています。専門分野外の人でもわかりやすいように噛み砕いた表現で執筆いただいているおかげで学部生や留学生にも理解しやすく、本誌をきっかけに論文を検索して読んでみたと報告してくれる学生も少なくありません。

このように、心理学の研究は皆様の知らないところで未来のアーティストやデザイナーの作品に活かされています。私も研究者の一人として取り上げていただけの研究ができるようにより一層精進するとともに、これからも皆様のご研究を学生とともに拝読できることを楽しみにしております。



みやさか・まきこ 女子美術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。博士（美術）。専門は美術、芸術心理学。Arts in Healthに関する研究のほか美術教育やキュレーションなども行う。

社会の役に立つとは？

88号「この人をたずねて」インタビュー

信州大学人文学部 助教

白井真理子

「この人をたずねて」のインタビュー経験についての執筆依頼を先輩からいただいたときに、私でいいのかな……と不安な気持ちにはなりましたが、せっかくなので、ペンをとることにしました。そもそも88号「この人をたずねて」（2020年）のコーナーにて、関西学院大学の佐藤寛先生にインタビューする機会をいただいたのも、「白井さんの研究は臨床の方とも相性がいいだろうから、一度お話ししてみても」という研究室の先輩のご配慮から実現したものでした（ちなみに私は悲しみ感情についての研究をしています）。そう思うと大変よい先輩に恵まれています。

さて、インタビュー当時の経験を振り返ると、なんといっても新型コロナウイルスが蔓延する前で、佐藤先生と直接お会いしてお話をうかがえたこと、当時新設された心理科学実践センターについてご紹介をいただいたことなどを思い出しました。お話をうかがう中で、今も印象に残っているのは、科学者と実践者の両立を体現されている姿と、佐藤先生が行われているご研究の一つである子どもに対する認知行動療法における、感情の扱いでした。

まず、科学者と実践者の両立という側面に関して、当時研究対象がもっぱら大学生であり、感情そのものの特徴というものを検討していた私にとって、科学的な知見を社会に応用・還元するということは、申請書等に形式的に言及するようなものでした（……すみません）。頭では大事さが分かりつつも、現実感を持っていませんでした。佐藤先生は精力的に研究を行われているのももちろんのこと、実践活動も行われているため、臨床心理学領域にとどまらず、他領域そしてさまざまな場面に応用し得る知見について具体的にお話を伺うことができました。この経験は、現在私自身も実験室を離

れた研究を始めたり、社会の役に立つために本当の意味で使える基礎的な知見は何なのかと思索することにつながっていると感じます。現状、特に答えが出ているわけではないですが、今後もその視点を本当の意味で忘れずにいたいと思っています。

次に感情の扱いについてです。インタビューの中で、小学生のうつ病介入プログラムにおいて、感情的な体験を言葉にするというプロセスの一つを紹介してくださいました。これはまさに、感情制御研究における affect labeling¹（感情を言語化する、非意識的な感情制御方略の一つ）に該当するものだ!と思い、こんなところでつながってくるんだなとワクワクしたことを思い出します。こうした感情体験の言語化がもたらす効果について、感情心理学の観点から科学的知見として支えることができる、その可能性を身をもって感じる事ができました。

感情は、ありとあらゆる人間活動に関わるからこそ、人間関係や社会から生み出されるさまざまな問題に本質的に関わっています。現実が生じている問題への対応や解決を目的とする際に、感情は常に関係するものの一つです。感情は異なる分野や方法の接点となるハブ・テーマであるともいわれており、心理学の枠にとどまらず、哲学、文学、歴史学、工学、医学など数多くの他領域で扱われてきています²。近年では、感情への注目が高まり、知覚、注意、記憶、行動といった研究分野においても、感情を扱った研究数が増加しています³。こうした現状を考えれば、インタビュー当時よりも社会の役に立つ感情の姿というものがよりリアルな形で描けるようになった気がしています。



しらい・まりこ 同志社大学大学院心理学研究科博士後期課程修了。博士（心理学）。専門は感情心理学。論文に Shirai, M., & Soshi, T. (2022) *Current Psychology*, 1-12. など。

¹ Torre, J. B., & Lieberman, M. D. (2018) *Emotion Review*, 10, 116-124. ² 今田純雄・中村真・古満伊里 (2018) 感情心理学. 培風館. ³ Duker, D. et al. (2021) *Nature Human Behaviour*, 5, 816-820.

連載最長不倒記録を楽しむ

— 心理学史というマイナー領域の情報を発信し続けて20年

初代編集委員会委員 / 心理学史に関する連載執筆

立命館大学総合心理学部 教授 / 学部長

サトウタツヤ

1997年、東京大学で隆夫サンと出会う

偶然か必然か分からないことが世の中には多々あるが、私にとって佐藤隆夫サン（現在、人間環境大学総合心理学部長）との出会いはまさにそれである。

1997年、当時福島大学助教授だった私にサバティカルのチャンスが巡ってきた。普通なら海外に行くところであるが、日本の心理学史研究をテーマにしていた私は「一番古い大学」に滞在することが必要と考え、高野陽太郎サンを頼って、東京大学に内地留学をすることにした。赤羽にアパートを借りて居を移して生活した。その時に知覚心理学の佐藤隆夫サンに出会った。実は隆夫サンのことはなんとなく知っていて、アエラムック『心理学がわかる。』（1994年）の知覚心理学者に推薦したのは私である。おもしろい知覚心理学者がいる、という情報は分野の違う私の耳にも入っていた。そして実際に会ってみたら意外にも？波長が合い、つかず離れずの関係が続いて、今に至る。

『心理学ワールド』創刊の現場に立ち会う

その隆夫サンが当時の日本心理学会常務理事だった牧野順四郎サンの特命を受けて『心理学ワールド』の編集委員を集めていた。そして私を誘ってくれたのである。編集委員会では新しい雑誌をどのように創ろうかといういろいろな議論をしていた。いろいろなアイデアがあるなか、隆夫サンが「雑誌ってのは連載があるもんだ！ 心理学史の連載をやれ！」みたいなことを言い出した。隆夫サンの記憶はどうか聞いてみたいが、私の記憶はこんな感じである。

それがすべての始まりで、気づいたら『心理学ワールド』に毎号記事を書く唯一の存在となっていたわけである。モチロン文章を書くのは嫌いではなかったし、心理学史に関する情報発信をすることができたのは大変ありがたいことであった。誰も読んでいないかも……

という悲観的な考えも頭をよぎるが、たまに研究者の方から「読んでますよ」と声をかけてもらうこともあるし、認定心理士の方々も気にかけてくださっているようである。

心理学史を連載するための工夫

執筆にあたっては、テーマのようなものを設定して、その枠内で記事を書くようにした。最初に設定したのが「ぐらふいっく日本心理学史」であり、あまり知られていなかった日本の心理学史を題材に、視覚的に表現しようという意気込みが現れている（ように思える）。その後、日本以外の心理学史も扱おうと考えて「みてみて実感！ 心理学史」に変更し、以下のようにテーマを変遷させていった。

表1 『心理学ワールド』心理学史のテーマ

1998年	創刊準備号	ぐらふいっく日本心理学史
2004年	26号	みてみて実感！ 心理学史
2010年	51号	イロイロ知りたい！ 心理学史
2013年	62号	心理学史の複雑経路
2016年	71号	日英両語で読む日本心理学史
2016年	75号	心理学史の中の女性たち
2018年	83号	心理学史 諸国探訪

ミライへ

個人的に、心理学史は楽しいし、いつか誰かの役に立つと思う。また読者の皆さん（研究者・実践者）の視点に立てば、いつかどこかの国の心理学史を知りたいと思う時が来ると思う。ある国の心理学がどのように始まりどのように広がってきたのか、ということは他者理解や関係構築にも欠かせないからである。

日本心理学会は2027年に創立100周年を迎える。学会からは『日本心理学会百年史』が発刊されるだろう。『心理学ワールド』の連載記事も100周年に花を添えたいと思っている。



東京都立大学卒。博士（文学 東北大学）。福島大学等を経て立命館大学へ。著書に『日本における心理学の受容と展開』（単著、北大路書房）、「カタログTEA」（監修、新曜社）など。

古典的実験機器と現在の機器の 共通点・相違点

52号～96号連載「心理学ミュージアム」著者を代表して

法政大学名誉教授

吉村浩一

本誌89号(2020年)から96号(2022年)まで8回にわたり連載した「古典的実験機器はどのように使われていたか」の記事を広く読んでいただきたく、この原稿を書いています。古典機器の話だけでは、ほとんどの人に興味をもていただけないでしょうから、現在の実験機器と比較する形で書かせていただきます。

共通点:心理学実験機器は心を測らない

奇異に思われるかもしれませんが、昔も今も心理学実験機器は心を測っていません。物理量やその変化量、せいぜい生理的状态しか測れません。測定している物理量や生理的状态が、何らかの心の状態を反映していると仮定して、心理学は実験機器を利用しているのです。そこには、測定した物理量や生理量と心的状態とに対応関係があるとするモデルが必要です。両者の対応関係がタイトなほど、すなわちモデルの蓋然性が高いほど、機器を通して得られたデータは心理状態のよい指標となるわけです。測定値が、想定している要因以外の影響を受けたり対応関係が明確でなかったりすると、得られたデータは心理状態のよい指標となりません。

アイカメラや脳活動測定機器などにより、近年は心理状態を直接測定できるようになったと思われるかもしれませんが、たとえば、アイカメラは、その瞬間の注意位置(心理状態)を捕らえていると。しかし、必ずしも視線方向=注意位置とは言えません。ピントがずれているかもしれないし、そこを見ている心そこにあらずということもあり得ます。また、脳の神経活動の記録も、脳活動が完全に機能局在しているなら、その部位の活性化は特定の心理状態の反映と言えますが、脳の神経細胞はさまざまに連結していて完全に局在しているわけではありません。もちろん、これらは他のモデルに比べると、かなりよいモデルと言えるでしょう。

相違点:センサー・信号伝達・記録法の違い

古典機器に比べ、現在の機器類は測定精度が格段に向上しました。測定部位に当てられたセンサー、そこで感知した信号の伝達手段、その値を記録する手段を電子化できたお陰です。アナログ信号がデジタル化され、信号はさらにノイズに強く扱いやすくなりました。そうした電子信号を利用できなかった古典的機器の時代はどうだったでしょう。腕を流れる血流量変化を測る容積脈波記録装置を例に説明しましょう。

脈拍数を知るには、現在でも簡易的には手首に指を当てて測ります。しかしそれでは、1回ごとの脈動の強さや間隔などは記録に残せません。それを実現するため古典的機器の時代には、腕をすっぽり覆う容器のすき間に水を満たし、血管の伸縮に伴う腕全体の容積のわずかな変化を、容器内の水量の増減で捕らえていました。すなわち、センサーは水だったわけです。血管拡張により容器からはみ出したわずかな水は、容器でっぺんにつけられたガラス管内の水の高さの変化として可視化できますが、それだけでは時々刻々のデータは残りません。これを残すには、ガラス管内の水量変化をゴム管を通して空気圧変化としてタンブールという変換器に伝えます。タンブールの役割は、ゴム管からの空気圧変化を薄い膜の上下動に変え、膜に当てられた棒状の接点をテコの原理で棒の先(作用点)の動きに変換します。棒の先は尖っていて、それが回転する円筒面に貼られた煤煙紙を掻き取り軌跡を残します(カイモグラフ)。一連の過程で、ゴム管内の水量変化は空気圧信号となり、棒先の位置変化、そして紙上の軌跡として残ります。

こうした工夫により精度を求めてきた測定の歴史を知る一方で、今日の私たちは物理的・生理的測定値と心理状態との対応関係のモデルも精練させていくべきです。



よしむら・ひろかず 専門は知覚・認知心理学。教育学博士。単著に『運動現象のタキソノミー(分類学)』『知覚は問題解決過程』『3つの逆さめがね(改訂版)』(ナカニシヤ出版)など。

OAQ (Occasionally Asked Question)

または 喜びも悲しみも幾星霜

61号～「裏から読んでも心理学」連載

慶應義塾大学文学部 教授

平石 界

驚いたのですが「裏から読んでも心理学」の連載開始からもう10年経ってました。連載開始が61号で今号が101号。毎年4号発行されるのですから計算は合ってる。他方でもっと長いこと書いているような気もするので、変なものです。ともあれ今回は特別編ということですので、「研究の背後にある流れ、論文の行間に現れる研究の楽しさや苦勞なども紹介（連載初回より）」することを目指してきた当連載の背後にある楽しさや苦勞などを、たまに寄せられることのあったご質問を手がかりに、紐解いてみたいと思います。

1. 何を言っているのか分からないのですが。

数年前、うっかりエゴサして見つけたツイート。うろ覚えですが「前に履修した心理学の教授が書いてるらしいんだけど、ちょう意味不明(笑)」みたいな感じだったと思います。全く申し訳ないことです。「この文章の想定読者は誰なのか?」という質問ですよ。メインには認定心理士と日本心理学会の会員の皆さん、つまり学部で心理学を一通り学んだ方々を想定してます。だから心理学で卒論やる苦しみを経た方にとって「あるある」な専門用語の解説はかなり端折ってます。t検定とかANOVAとか。文字数厳しいのでご容赦いただければ。

2. 文献情報は?

新聞とかで「〇〇大学が××という発見を報告した」みたいな記事を見かけるたびに「論文の情報を書けやあ!」「なんでデジタル版なのに論文へのリンクが全角アルファベットでベタ打ちなんじゃあ!」と吠えている私ですが、当の自分の記事には書誌情報がない。これはですね、「原典が気になるなあ」と思うような方にはですね、ご自分で原典を探すプロセスをも楽しんでいただきたいと、そうした深い配慮に基づいた行為な

のです。…いやほんとすみません。文字数の問題です。探すの面倒な方は、文献情報付きの「まとめ」ページを作ってる方がいらっしゃるようなので検索してみてください。

3. どうやってネタを集めてるの?

連載開始から遡ること数年、某所に「ツイッターやってる人って信じられない」と語る人物がいたそうです。「ガンガン流れてくるつぶやきをずっと追いかけるとか、暇なの?」。はい、暇なのは私でした。いやほんとツイッターがなかったら過去のネタの大半は入手できなかったと思います。ただ最近ちょっと界限が殺伐としてきている印象がありまして、新たなネタ元を開拓しようかとは思ってます。

4. どうやってネタを選んでいるの?

連載初期に友人から「うん、面白かったよ。なんの役にも立たなそうなのが良いよね」という言葉を頂きました。天啓というのでしょうか。而来この言葉を頼りに、役に立たなくてこそ学問!という気概で、そういう原稿を書けそうな文献を選んでいきます。

5. ひねりすぎ。

実は毎回の執筆はそれなりに苦勞してしまっていて、ふと我に返って原稿料を時給換算して「最低時給……」とか呻いたりするわけです。何を言いたいかということですね、半分趣味だから持続できているようなものなので、無駄に凝った構成とか、誰にも分からない言葉遊びとか、そのへんのところは平にご容赦願いたい。それが楽しみで書いているようなものです。

6. 最後に一言。

これからもたまに読んでいただければ幸いです。



ひらいし・かい 東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。東京大学、京都大学、安田女子大学を経て、2015年4月より慶應義塾大学博士(学術)。専門は進化心理学。

執筆と担当からみる「つながり」

男女共同参画推進委員会「私のワークライフバランス」担当
玉川大学リベラルアーツ学部 教授

宇井美代子

『心理学ワールド』86号(2019年)から、日本心理学会男女共同参画推進委員会が企画した「私のワークライフバランス」のコーナーが始まりました。近年、ワークライフバランスへの関心が高まってきましたが、それはまたワークとライフのバランスをとることがいかに難しいかを示唆するものであり、研究者も同様です。そのような中、それぞれの研究者がワークライフバランスをどのようにとってきたのかについて執筆者に語っていただくことで、読者のヒントになればと、企画されたものです。2023年1月に発行された100号までの間に、14名の方にそれぞれのワークライフバランスについて執筆していただきました。

私は現在、男女共同参画推進委員として本コーナーの担当をさせていただいております(近々、次の担当者の方に引き継ぎます)、実は初回の執筆者でありました。本コーナーの企画者である前担当委員の方から、お声がけいただいたのです。最初は「私なんか“ヒント”だなんて、おこがましくて、とんでもない!」と尻込みをしたのですが、「すばらしいこと」を披露するのではなく、ただただ普段感じていること、行っていることを書いてほしいとのことでしたので、お引き受けしました。当時4歳の娘をバタバタと育て、バタバタと仕事をしておりましたが、いざ書いてみますと、夫と協力し、周囲の方々からの支援をいただきながらという「つながり」の中でワークライフバランスをとっていることに気づく機会となりました。

その後、今度は自分が男女共同参画推進委員となり、本コーナーの担当者として、執筆をお願いする立場となりました。「これこそが正しいワークライフバランス」というものがあるわけではありません。それぞれの状況や考えはさまざまであり、それぞれ独自のワークライフバランスがありますので、年齢層や職や家庭の状況ができるだけ異なる方々に執筆をお願いするようにし

ています。「私でいいんですか?」と、私と同じような反応をされる方もいらっしゃいましたし、自分の経験や価値観を押しつけることにならないように、一言一句に注意を払いながら書いたという方もいらっしゃいました。

本コーナーをお読みくださった方から「毎回、楽しみにしている」との声をいただくことがあります。これは執筆してくださった方々のおかげであり、担当者としてもありがたく思います。一方、「書かれているようにうまくいくことばかりではない」とご指摘いただくこともあります。さまざまに大変な状況の中にいらっしゃる方もおられると思いますし、執筆者の方からも限られた誌面の中、「書けないこともある」とお知らせいただくこともありました。

本コーナーで書かれていないことのいくつかについては、男女共同参画推進委員会が企画・実施している「女性研究者ネットワークイベント」や「メンタリングイベント」のほか、「ジェンダー Tips」というメールマガジンのほか、「ジェンダー Tips」というメールマガジンのほか、院生の方からベテランの方まで多くの方に集まっていたり、それぞれのご経験やお考え、疑問、有益だった制度などをざくばらんに情報交換をしています。ご興味・関心のある方はぜひご参加ください。詳細は日本心理学会のサイト内にある男女共同参画推進委員会のページでご確認いただけます。

私は執筆者と担当者という2つの立場から本コーナーにかかわることができました。執筆者としては自分と周囲とのつながりを感じる機会となりました。担当者としては、できるだけ多様なワークライフバランスをご紹介し、またイベント等を通して研究者間のつながりの一助となればと思います。担当者から執筆のお声がけがありましたら、ぜひお引き受けいただき、ご経験を読者のみなさまにシェアしていただけると幸いです。



うい・みよこ 筑波大学大学院博士課程心理学研究科修了。博士(心理学)。専門は社会心理学、ジェンダー。著書に『社会に切りこむ心理学』(共編著、サイエンス社)など。

『心理学ワールド』の制作に携わった10年間

51号～89号制作担当

株式会社北大路書房

森光佑有

実務教育出版から『心理学ワールド』の制作を新曜社が引き継いだのが約13年前。以来、京都の北大路書房に転職するまで約10年間にわたり本誌の制作を担当しました。学会誌の制作自体初めて任されるうえ、カラーページや新コーナーを交えて誌面を大幅リニューアルすることになり、納品までのタイムリミットが迫る中、さまざまな方々に助けをいただきながら手探り状態で準備を進めていた当時の心境が懐かしく思い起こされます。その時はよもや、101号の特集で自分が執筆することになるとは思いもよりませんでした。

今回の特別企画は、これまで本誌51号以降に掲載された気になる記事を2～3本ほど振り返って紹介するというテーマで各自書くことになっていたかと思いますが、一方で「制作のウラ話も交えつつ」というご要請もいただきましたので、そうした話題に主に焦点を当てて書くことにします。

「特集」や「小特集」企画の舞台裏

『心理学ワールド』では、毎号、さまざまなテーマで特集や小特集が企画されています。これらの企画は、いつもどのように立てられているのでしょうか。

企画の立案者は、本誌の編集委員会の先生方です。編集委員はそれぞれ任期中に特集と小特集を各2回程度持ち回りで担当し、テーマや執筆候補者案などを企画案に取りまとめ、年4回開かれる編集委員会に提出します。企画案は自由に立てられるため、担当編集委員のご専門やご関心に沿う中身になることが多く、先生方の多様なバックグラウンドや人脈が、毎号の多彩な企画内容へとつながっています。

編集委員のメンバー自体、心理学のさまざまな専門領域からバランス良く構成されるように選出されていて、2年ごとに約半数が任期を終えて交代します。コロナ禍以前には新旧の編集委員が交代するタイミングで

「懇親会」が開かれていました。懇親会では打ち解けた雰囲気でお酒を飲みながら美味しいお食事をいただき、先生方や学会事務局の方々と心理学その他いろいろ語ったひとは、本誌の制作に携わってきた中で最も楽しかった思い出の一つです。

また、特集は時に、社会的にあるいは心理学界にとつて重大な出来事に焦点を当てて企画されることがありました。そのような企画の例として、「東日本大震災から1年」(57号, 2012年)、「その心理学信じていいですか?」(68号, 2015年)、「公認心理師 現状と将来」(86号, 2019年)などがあり、公益社団法人として日本の心理学をリードする学会の姿勢を明確に打ち出す中身となりました。

私にとっての『心理学ワールド』

学術書の編集者の仕事を続ける楽しさの一つは、お給料を稼ぎながら、自分の興味・関心ある学問領域の「学生」としてずっと居られることです。心理学の最先端の話題をバラエティ豊かに、かつまっとうに伝える『心理学ワールド』は、私にとって、大学生の時に感じていた心理学の学びの楽しさの初心へといつも立ち返ることのできるメディアでした。どの編集委員の先生方も「自分の専門領域の心理学の面白さを伝えたい!」という熱意を抱いて特集や小特集を企画していました。本誌の制作に携わることのできた10年間をいま改めて振り返ると、とても刺激的で幸せな日々を過ごしていたように思います。

本誌の制作を通じて感じたことや教わったこと、いただいた先生方とのつながりを新たな環境で図書出版へと活かしながら、学術書の編集者としてマーケットと学問をつなぎ、心理学ワールドの広がりや発展に少しでも貢献できれば10年間の恩返しになるのかな、と思っています。



もりみつ・ゆう 東京都立大学人文学部心理学科卒業。一般企業への就職を経て、出版社に転職。日本評論社に非常勤で約2年間、新曜社に正社員で約10年間勤め、2020年より現職。

もう一度やりたい 学会の仕事ナンバーワン

63号～78号 編集委員

大阪電気通信大学 情報通信工学部 教授

小森政嗣

63号～78号 編集委員

上智大学総合人間科学部心理学科 教授

樋口匡貴

樋口 今回の対談ということで、よろしく願います。さて、『心理学ワールド』の編集委員会はとても楽しかったです。もう一回やってもいい!と思える数少ない仕事の一つであることは間違いない。

小森 僕らは2014年からの4年間の担当でしたよね。振り返ってみたら、楽しかったねえ。

樋口 『心理学ワールド』の編集委員会の主業務って、特集あるいは小特集の企画ですよ。企画内容を考え、同時に誰に執筆をお願いするかを考え、そして実際に依頼する。ドキドキしながら原稿ができあがってくるのを待って、提出されたらその内容を楽しむ。そしてもし修正して欲しい点などがあれば、あるいは他の原稿と調整が必要な点があればそれについて相談する。そしてすべての原稿が完全に整ったら、わくわくしながら印刷が上がってくるのを待つって感じですね。

*

樋口 昔のフォルダを漁ってみたら、僕は特集を3回、小特集を1回担当してます。個人でやったやつとしては、68号の特集「その心理学信じていいですか?」(2015年)、75号の小特集「病気と付き合う」(2016年)、79号の特集「心理学はセックスを理解しているか」(2017年)の3つ、それに加えて小森さんと共同で担当した72号の「われわれは何をなすべきか — 東日本大震災と心理学の5年間を振り返る」ですね(2016年)。

僕はとにかく自分が知りたいことや読みたい原稿をお願いする、そして一緒に仕事したい人に依頼をするって原則で臨んでいたんで、結果的にとても良かったです。謎の自信があって、僕がおもしろいものは多くの読者にもきっとおもしろいだろうって思ってやりました。編集委員会のメンバーも何ともサポータータイプで、いちいち「なにそれおもしろい」っていう方向で反応してくれました。任期最初の委員会後の懇親会の席で担当常任理事の阿部純一先生が、雑談に対していちいち

「それはおもしろい記事になるね」「それも特集できるね」って拾ってくださったのもとても良く覚えています。

小森 僕自身は、いわゆる大学教員以外の方にも登場いただくよう心がけていました。77号特集「暴力 — どこから生まれるのか? いかにして克服できるのか?」(2017年)では陸上元オリンピック代表の為末大さんにアスリートの立場からスポーツの現場での体罰の根絶に向けた取り組みや道筋を書いていただきました。69号小特集「ライフログと心理学」(2015年)では、心理学をベースにした研究開発企業の澤井大樹さん、浅野昭祐さん(ともにイデアラボ)にご登場いただきました。心理学のフィールドは大学だけじゃなくて、社会で求められているんだ、ということを知っていただきたかったです。

樋口 僕が初めて担当した特集は68号の「その心理学信じていいですか?」(2015年)だったのですが、もう気合い入れて誰に頼むかから何から考えまくった。結果、平石界・池田功毅、三浦麻子、小塩真司、大久保衛亜という当代きっての先生方をお願いすることができて、とても良かったです。ただ原稿が出てきてからが本番だったんですよ。最初にいただいた原稿が平石さんと池田さんの共著ものだったんですが、「心太」という名前のいたいけな心理学専攻大学生が主人公の物語仕立てになっていた。『心理学ワールド』の特集でこの形式のものが出てくるとは思っていなかったんで、正直、最初は面食らったんですよ。心理学における再現性問題を解説した普通の総説論文ばい原稿が出てくると思ってた。まあ悩みましたね。どうしよう、これはもう一度相談してみようか、と。そんなこんなで悩みながらもう一回読んだら、あれ、これいいかも。もう一回読んだら、いやもうこれだよ、これが読みたかったやつだ、と。結局いまだに本人たちには伝えていないですが、あの逡巡は今でもよく覚えていますね。さらにこの特集につい

ては印刷が上がってきた後にもうひと騒動あったんですが（ローマンでTwitterを検索してください）、結果的には本当にいい特集ができたといまだに思っています。小森 再現可能性問題は2023年の今ではもうかなりの人が知っていて、心理学の根幹に関わる問題だという認識が広まりつつあると思います。でも2015年当時は少なくとも日本では全くそうではなかった。その時期に紹介できたのはとてもよかったと思います。

小森 あとセックス特集も外せないでしょ？

樋口 そうなんです。79号「心理学はセックスを理解しているか？」（2017年）の特集を決めた時の編集委員会のこともとても良く覚えています。僕にとっては最後の特集の機会だったのでもう一つ候補だったネタとどちらにしようか悩んでいたんです。でも会議の場で小森さんが「セックスの特集は樋口さんしかやれんでしょ」って言うてくれて、それで決まったんです。

小森 そうでしたっけ？

樋口 忘れてんのかい。

*

樋口 そして何よりも、やっぱり震災特集（72号「われわれは何をなすべきか — 東日本大震災と心理学の5年間を振り返る」2016年）の話は欠かせないですね。これも会議の席でたまたま隣になった小森さんが「次の号の特集、震災のことを提案しようと思ってるんだけど、手伝わん??」って声かけてくれて始まったやつでしたね。

小森 震災から5年間、心理学者はそれなりにいろいろなことをやってきたと思うんですよ。心理学と日本心理学会が震災の問題にどう取り組んできたのかを一度きっちり紹介したかった。

図1 震災特集の取材で訪問した南相馬の海沿いの夕暮れ



樋口 特集の最初に安藤清志先生が学会としての取り組みを紹介してくれていますよね。特集の大きな枠組みとして、学会や研究者サイドからみた震災問題についての総括、それから「こころのケア」「風評被害」「コミュニティの分断」という3つの問題を取り上げた。当時はこれらの問題がとても重要だと考えましたよね。

小森 震災は複雑な問題だから、いろいろな面から取り上げなければいけなかった。それに震災から5年経った当時でも震災はとても繊細な話題でしたよね。当時小学生だった息子にこの特集の文章をすべて読ませて、誤った読み方をされないか確かめてから、校了にしたんですよ。

樋口 日本心理学会は震災について真剣に取り組んでいたように感じている、復興のための実践活動や研究のための助成金も早々に出してましたよね。

小森 ただ、心理学はこんなことやったんだぜ!的な自画自賛はしたくなかったんですよ。だからちゃんと当事者の話も聞きたかった。風評被害の研究に協力させていただいていたスーパー Saiya西野貴守店長のインタビューで南相馬にも行きました。あと、福島の方の意見もちゃんと紹介したかったんです。震災1年後の特集（57号「東日本大震災から一年」2012年）で飛田操先生が「福島から会員のみなさまへのお願い」というタイトルの寄稿をしておられて、それもあって飛田先生にはまた5年後の今を書いていただきました。「パンドラの箱と幽霊」というタイトルの最後「ただ、恐れるべきは、箱から飛び出してきた幽霊そのものではなく、その存在をめぐって対立する人々の間での分断なのであろう。」という一文には、学者として目の前の大きな問題に向き合わざるを得ない苦悩が吐露されていたように思います。

樋口 なんて表現したらいいか難しいですが、とてもいい文章をいただいたと感じました。

小森 うんうん。



こもり・まさし 大阪大学大学院博士後期課程修了。博士（人間科学）。専門は感性工学、非言語行動など。単著に『RとStanではじめる心理学のための時系列分析入門』（講談社）。担当はギター（テレキャスター）。



ひぐち・まさたか 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期修了。博士（心理学）。専門は社会心理学。著書に『社会心理学・再入門』（監訳、新曜社）など。担当はギター（ストラトキャスター）。

高橋 伝 校生 たいに 偏見の心理学

Psychology for U-18

東京大学大学院人文社会系研究科 教授
唐沢かおり



からさわ・かおり 専門は社会心理学。著書に『社会的認知』（編著、ナカニシヤ出版）、『概念工学』宣言!』（共編著、名古屋大学出版会）、『なぜ心を読みすぎるのか』（単著、東京大学出版会）など。

偏見をめぐる問題

現代社会では、「偏見はよくない」という価値観が共有されています。皆さんも、偏見的な言動に接したら不快に思うでしょうし、自分がその対象となったら、悲しく感じるでしょう。偏見やそれに基づく差別的な他者の取り扱い、人権問題にもつながり、社会の中にあってはならないことだと私たちは考えています。しかし、そうであるにもかかわらず、この社会に偏見が存在していることは否定できません。なくすべきことだと皆が考えているのに、社会からなくならない……。それはなぜでしょうか。社会的な場面での判断や行動の特性を研究してきた社会心理学は、偏見に関わる心の働きという観点から、この問題に取り組んできました。本稿では、その成果を踏まえ、「気が付かないうちに偏見的な判断をしてしまう」という点に着目して解説します。まずは、次の文章を読み、最後の問いについて考えてください。

ドクター・スミスは、アメリカのコロラド州立病院に勤務する腕利きの外科医。仕事では常に冷静沈着、大胆かつ細心で、州知事にまで信望が厚い。ドクター・スミスが夜勤をしていたある日、緊急外来の電話が鳴った。交通事故のけが人を搬送するので執刀してほしいという。父親が息子と一緒にドライブ中、道路から谷へ転落し、車

は大破、父親は即死、子供は重体だと救急隊員は告げた。20分後、重体の子供が病院に運び込まれてきた。その顔を見てドクター・スミスはアッと叫び、そのまま茫然自失となった。その子はドクター・スミスの息子だったのだ。さて、交通事故にあった父子とドクター・スミスの関係は？

有能な外科医は男性？ — ステレオタイプの働き

この文章は、社会心理学の教材としても使われますので、見たことがある読者もいるでしょう。授業でこの問いかけをすると、悩んだ末、「ドクター・スミスは離婚しており、元の奥さんは、ドクター・スミスとの間に生まれた息子を連れて再婚した。運び込まれたのはその息子で、なくなった父親は再婚相手」というような答えが出てきます。その一方で、種明かしをするかのようにニヤッとしながら、「ドクター・スミスはなくなった父親の奥さんですよ」と言う人もいます。さて、皆さんはどのような答えを考えたでしょうか。

どちらもこの文章から成立する関係であり、正解が決まっているわけではありません。しかし、ドクター・スミスと亡くなった父親が夫婦だというシンプルな関係が、人によっては思いつかず、より複雑な、離婚して云々という関係を答えたのです。このことの背後には、ドクター・スミスを男性だと思いきこんでしまった心の働きがあります。

有能な外科医という社会集団のイメージが女性ではなく男性であったので、関係を考えるときにも、ドクター・スミスが男性だという前提を、暗黙のうちに持ち込んでしまったのです。

社会集団に対する固定的なイメージや信念はステレオタイプと呼ばれており、様々な判断に影響します。例えば「高齢者は頑固だ」というステレオタイプを持っていると、ある高齢者に接したとき、本人をよく知らなくても、「頑固だ」と決めつけた判断がなされがちになります。ステレオタイプには「日本人は真面目だ」のようにポジティブなものもありますが、個人個人の違いに注意を向けることなく、集団全体へのイメージや信念から紋切り型に判断してしまうことが問題になるのです。

先の問題において、「有能な外科医」から男性だと思いつくこと自体は、偏見とは言えないという考えもあるでしょう。実際、外科医は女性より男性の方が多いという現実もあります。しかし、その思い込みから、女性の外科医に対して「有能ではない」と判断すると偏見となってしまいます。ステレオタイプが偏見的な判断につながる可能性を確認しておきましょう。そのうえで、次節では、気が付かないうちに、ステレオタイプが偏見的な判断につながることを示した実験を紹介しつつ、「確証バイアス」と呼ばれる情報処理の働きについて考えていきます。

確認バイアスと偏見

ステレオタイプを当てはめた判断が偏見につながる可能性を指摘しましたが、単に当てはめるだけではなく、ステレオタイプに合致するように情報を解釈してしまうことも問題となります。この点について、アメリカの社会心理学者であるダーリーたちが行った実験を紹介しましょう¹。

この実験の課題は、小学生の女の子が登場するビデオを見て、学力レベルを判断することです。ビデオは、女の子が自宅周辺で遊ぶ様子の前半と、教師の質問に答える様子の後半とで構成されています。参加者の半数は、前半だけを見て、また残りの半数は後半も見てから学力レベルを判断します。さて、この実験で重要な点は、前半の自宅周囲の様子で、女の子が所属する社会階層がわかることです。2種類用意されており、富裕層の居住エリアを見る条件と、さほど富裕ではないエリアを見る条件のいずれかに参加者は割り当てられます。ビデオの後半は一種類しかなく、難しい問題に正答したり、簡単な問題に間違ったりというように、学力レベルがわかりにくい内容になっています。

実験の条件を整理しましょう。ビデオの種類により、参加者は、①富裕層エリアで遊ぶ様子のみを見る、②富裕ではないエリアで遊ぶ様子のみを見る、③富裕層エリアで遊ぶ様子を見た後、教師の質問に答える様子を見る、④富裕ではないエリアで遊ぶ様子を見た後、教師の質問に答える様子を見る、のいずれかに割り当てられます。

さて、参加者は学力レベルをどう判断したでしょうか。前半のビデオのみを見た参加者に着目すると、居住エリアにかかわらず、女の子の学年相当の学力であるという判断をしていました。つまり、ここでは偏見的な判断は見ら

れませんでした。しかし、後半も見た参加者については、富裕ではないエリアで遊ぶ様子を見た方が、富裕層エリアで遊ぶ様子を見た場合に比べ、学力が低いと判断したのです。「社会階層が低いと学力も低い」というステレオタイプを当てはめた、偏見的な判断がなされたということになります。

しかしながら、参加者はそのことに気が付いていません。また、さらに重要なことは、居住エリアに関する情報に基づき、後半のビデオに対して、偏見的な学力判断を裏付ける見方をしていることです。この実験では後半のビデオを見た参加者に、内容についていくつか質問をしていますが、ここでは、前半に富裕層エリアで遊ぶ様子を見た参加者に比べて、富裕ではないエリアで遊ぶ様子を見た参加者は、出された問題が簡単であった、正答数が少なかったなど、学力が低いことを裏付けてしまうような見方をしていたのです。

このような情報処理のありかたは、確認バイアスと呼ばれます。このバイアスは、自分の考えや信念が正しいことを確認する情報を集めることにつながるため、他者や社会に対する安定した認識を維持できるというメリットがあります。考えや信念に反する情報に接するたびに、それらを疑い変えることは、確かに大変でしょう。しかし、保持している考えや信念が変わりにくくなるのですから、偏見的な考えや信念が、反する事例に出会っても変わらず維持される結果を招くことにもなるのです。

偏見の低減にむけて

ステレオタイプの当てはめや、確認バイアスにより、自分でも気がつかないうちに、偏見的な判断がなされるという心の仕組みを見てきました。

このことから偏見をなくすことに

いて、悲観的な見方が出てくるかもしれません。私たちの心の働きの中に、偏見を維持する仕組みが埋め込まれているわけですから、確かに偏見を根絶することは困難です。しかし、だからと言って低減する努力の放棄が正しいとも言えないでしょう。偏見や差別に苦しむ人たちがいる以上、私たちはこの問題に向き合わねばなりません。啓発活動や、差別を禁止する法律などが、まずは対応策として思いつくことがらでしょう。

それらに加えて、心理学の立場からは、本稿で述べた「偏見を生み出す心の仕組み」に抵抗する必要を挙げておきましょう。偏見がもたらす問題を知り、それを少しでも低減しようという動機を持つこと、そして、自分の考えや信念、また言動に対して、より注意を向け、意識していなかった偏見を意識することがポイントです。ステレオタイプや確認バイアスの働きを知ることは、意識しないまま保持したり表明されたりする偏見への気づきを促します。気づけば、そして、偏見が良くないと思っているなら、反省したり、不用意な発言はしないよう気をつけるでしょう。これは地道なことですが、一人ひとりが積み重ねることで、少しずつでも社会から、偏見的な判断や言動が減ることにつながります。偏見を生み出す心について知ることは、社会から偏見を減らすためにも重要だと言えるでしょう。

Book Guide ブックガイド

『偏見や差別はなぜ起こる?: 心理メカニズムの解明と現象の分析』北村英哉・唐沢穰(編)、ちとせプレス、2018年
偏見や、偏見を生み出す心の仕組みを、人種・ジェンダー・高齢者などの具体的な対象も取り上げて、解説しています。

¹ Darley, J. M. et al. (1983) *JPSJ*, 44, 20-33.

「のりうち」と ハーム・リダクション

人間環境大学総合心理学部 講師

横光健吾



よこみつ・けんご 北海道医療
大学大学院心理科学研究科博士
後期課程修了。博士（臨床心理
学）。専門は依存症と臨床心理
学、メンタルヘルスとICT。著書
に『心の健康教育ハンドブック』
（分担執筆、金剛出版）など。

ハーム・リダクション

ハーム・リダクションとは、もともと物質使用に関する治療、実践から生まれてきた理念であり、違法か合法かに関係なく、物質使用や特定の行動を「ただち」にやめることを求めず、そのうえで、それらの物質や行動が引き起こす、さまざまな健康上のあるいは社会的なリスクを優先づけし、そのリスクからの影響を減らすための介入と定義されている¹。ハーム・リダクションは、厳罰政策の限界から出発した、効果的な公衆衛生政策と支援実践の理念であり、何よりも薬物使用者の人権を尊重し、支援から疎外された人間を孤立から救い出すための倫理的実践であると言われている。その実践のタイプから、従来型（違法薬物の使用許可エリアの設定）、付随する害の低減・除去型（加熱式タバコ・1円パチンコ）、報酬効果低減型（低カフェイン飲料・低カロリー食品）に分けることができる。

ギャンブルとハーム・リダクション

筆者は、ギャンブルにおけるハーム・リダクションアプローチを考えるにあたり、「のりうち」の可能性に注目している。「のりうち」の学術的な定義は、「複数のギャンブラーと一緒にギャンブルを行い、お互いの収支がプラスになるように相談しながらギャンブルを

し、最終的な収支差額を折半する」ことである²。筆者を含む研究グループは、予備的な研究を終えたばかりであるが、40名のギャンブラーを対象に無作為化比較対象試験を実施し、「他人の存在が危険なギャンブルを抑制するのではなく、刺激する」ことを明らかにした。二次的な解析を実施したところ、重症度の高いギャンブラー同士の場合、一人でギャンブルをする場合と比較して、「のりうち」をした場合のほうが、ギャンブルの抑制につながる可能性を示唆した。今後、スロットマシンやパチンコ、ディーラーとのテーブルゲームなど、実機や実際のギャンブル場での研究の実施、謝礼を支払ったうえで、協力者自身のお金を使用してもらうなど、より実際のギャンブルに近い形での研究成果を積み重ねていくことで、「のりうち」が「本当に」ギャンブルのハーム・リダクションアプローチとして有効か、明らかにしていくことが可能であろう。

社会的促進・社会的存在の影響を 検討したギャンブル研究者

横光らの論文が出版されて間もなく（正確には39日後）、ギャンブル研究の第一人者であるグリフィス（Griffiths, M. D.）博士が、コメント論文³を発表している。そこでは、「横光らの論文では引用がされていないが、社会的促進や社会的存在の影

響を検討した研究は他にも複数あるので、横光らのもっとそういった論文を引用しなさい」というものであった。横光らの論文の主な狙いは「のりうち（つまり、複数で一緒に行うだけではなく、収支差額を折半すること）」にあったため、社会的促進や社会的存在の影響に関する引用が少なかつたと言える。横光らの論文では、ギャンブル時の社会的存在の影響を検討した研究者であり、他者から観察されることで、ギャンブル行動が抑制されることを明らかにしたロックロフ（Rockloff, M. J.）博士の論文は複数引用されている。このように、他者が存在するかどうかと、他者との収支差額を折半するかどうかとは、ギャンブル行動に異なる影響を与えるかもしれない。

おわりに

筆者はギャンブルとハーム・リダクションアプローチの研究をしながら、「ギャンブルと上手に付き合うことはできるのか」という問いに挑戦している。現在、オンラインカジノをはじめとして、インターネットからいつでも、どこからでも参加可能なギャンブルの問題が顕在化し始めてきている。社会からの要請は、これまで以上のギャンブル研究の加速化であり、ギャンブル研究者が増えていくことは筆者の願いでもある。

1 松本俊彦 (2019) 精神神経学雑誌, 121, 914-925. 2 Yokomitsu, K., Kono, M. & Takada, T. (2022) *J Gamb Stud*, 39, 281-298. <https://doi.org/10.1007/s10899-022-10156-0>
3 Griffiths, M. D. (2022) *J Gamb Stud*, <https://doi.org/10.1007/s10899-022-10168-w>

進化と適応の心理学

— 私たちの繁殖戦略

早稲田大学文学学術院 助手

瀧川諒子



たきかわ・りょうこ 早稲田大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程。修士（文学）。2023年4月より現職。専門は生理心理学、発達心理学。進化や適応の考え方を理論的背景において研究を行う。

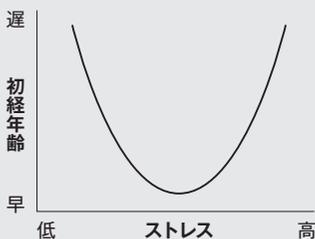
生活史と初経年齢

個体が環境に適応するうえでは、自己の成長、生命維持、繁殖、養育といった生活史上の各タスクに、利用可能な資源を適切に分配する必要がある¹。多産多死型／少産少死型のよう、様々な生物種はそれぞれに固有の生活史を持つ。しかしながら心理学領域においては、このような考え方が、ヒトという種内における個体の発達様式の違いを説明するために用いられることがある。とりわけ女性における初経年齢の個人差は注目を集めてきた。

初経年齢とストレス

初経年齢の予測モデルに関する興味深い推察がある²。これによると、初経前に経験したストレスの程度に応じて、初経年齢を予測する曲線はU字を描く(図1)。つまり、個体の生存を脅かす重度のストレス環境下では繁

図1 ストレスと初経年齢
(Ellis, 2004, 脚注2を改変)

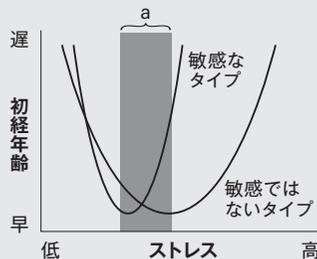


殖よりも生命維持が優先されるため、繁殖を開始する時期(初経)を遅らせるべきである。一方、それほど深刻ではない中程度のストレス環境下では、より早期に繁殖を開始し、生存する子どもの数を最大化させる必要がある。脅威となるストレスが少ない良好な環境下においてはまた、少数の子どもに多くの資源を投資し、子どもの適応度を最大化させるために、生理的・社会的環境が整うまで繁殖の開始を遅らせる。

ストレスに対する鋭敏性

そこで筆者は、ストレスに対する生理学的反応の現れやすさに関する個人差が影響する可能性も考慮し、出生前の母胎内ストレスを反映する出生体重を用いて初経年齢との関連を検討した。ストレスに敏感なタイプとそうでないタイプは、ストレス課題前後における唾液中コルチゾールレベルの増加率を指標として同定された。

図2 ストレスに対する鋭敏性による初経年齢予測曲線の違い



その結果、敏感なタイプとそうでないタイプでは同じ低出生体重に対して真逆の反応を見せることが明らかになった³。つまり、敏感なタイプはストレス閾値が低いため、そうでないタイプにとって初経年齢を早める中程度のストレスになり得る低出生体重に対しても、重度のストレスに対するかのように反応し、初経年齢を遅らせたことが考えられる(図2a)。この結果は、前述のモデルが将来的には図2全体に示すようにブラッシュアップされる可能性を示唆している。

おわりに

個体に働く自然選択プロセスは、私たちが最も適応的であるように種々の戦略を遺伝子にプログラミングしてきた。しかしながら祖先の環境から大きく様変わりした現代では、かえってその戦略が適応的でなくなることがある。たとえば、適正範囲外の年齢で初経を迎えた女性は後年の健康リスクが高い⁴。これを踏まえても、日本では先進国の中でも低出生体重児が多いという事実⁵は憂慮すべきであろう。胎児期の母体の状態や乳児の生育環境を適切に管理し、母子の健康の維持・向上に資する研究が求められている。

1 Charnov, E. L. (1993) *Life history invariants*. Oxford University Press. 2 Ellis, B. J. (2004) *Psychol Bull*, 130, 920-958. 3 瀧川諒子他 (2021) 日本人間行動進化学会第14回大会発表論文集, 31. 4 Adair, L. S., & Gordon-Larsen, P. (2001) *AJPH*, 91, 642-644. 5 後藤由夫 (2006) 肥満研究, 12, 1-2.

認定心理士の会から

研鑽の機会の提供という役割

普段は大学教員として、心理学を専攻とする学生の教育をおこなっています。カリキュラムが領域特化したものではないこともあり、学生は必ずしも心理学に関する仕事に就職していくわけではありません。むしろ、心理学と直接的には関係のない仕事に就くケースの方が多いといえます。

そのような点では、卒業生が大学で学んだ知識や経験を社会でどのように活用しているのかは見えにくいところもあります。もちろん、卒業後も何かの折にやりとりする卒業生であれば、ある程度の状況はわかりますが、そうでない卒業生は、いったいどのようなことをやっているかわかりにくいのです。そして、心理学に対してどのように向き合っているのか、向き合うことがあるのかもわかりにくかったりします。

さて、今期に新しく認定心理士の会の運営委員として加わり、さっそく関東支部会の企画においてご挨拶のようなものをさせていただきました。すると、企画の後の参加者の感想の中に、私の授業を受けた卒業生であること、私の姿を見て驚いたということ等が書かれているのを見つけました。

卒業生の方も驚いたのでしょうか、私の方も驚きました。まさかこんなところで再会(?)するとは思っていなかったからです。その卒業生が心理学を生かした仕事に就いているのか否かはわかりませんが、少なくとも心理学に対して今でも興味を持ち、そして学習する意欲があり、そして実際に行動に移している(企画に参加している)ということに、驚きとうれしさを感じました。

学ぶことは、いつでもとは言いがたいですが、状況を作り出すことができれば、おこなうことが可能です。そのきっかけとして認定心理士の会の企画が役に立てばと思います。

(認定心理士の会運営委員会委員 鈴木公啓)

若手の会から

若い人が気軽に発表できる場を

本年度も、日本心理学会第86回大会にて「学部生・高校生プレゼンバトル」が開催されました。本企画は、学部生や高校生が自身の研究やアイデアを発表できる場として、若手の会主催で毎年行われています。若手の会新幹事として、初めてプレゼンバトルの審査に携わりましたが、率直な感想として、その完成度の高さとアイデアのおもしろさに圧倒されました(「うんこ」をテーマにした発表は笑いましたし、そのアイデアと研究デザインにも驚きました)。卒論の構想やアイデアを発表するだけでなく、すでに調査や実験を行っていて、その結果の発表と考察も行っている発表者が多い印象でした(もちろん、適切な統計的解析も!)

私が高校生・学部生の頃はどうかだったかなと考えると、アイデアも微妙でしたし、発表もダメ出しを食らいまくってダメダメだった記憶があります(笑)。そう考えると、最近の高校生・学部生は心理学に対する興味・知識と、研究能力が圧倒的に向上している印象でした。

若手の会では、今後も高校生や学部生が研究発表をできる場を企画し、若い皆さんが心理学により興味を持ってもらえるよう、そして研究レベルの向上へ少しでも貢献ができればと考えています。次年度も日本心理学会大会にて「学部生・高校生プレゼンバトル」を開催する予定です。学部4年生の方は、これまでに行った卒業研究や、大学院に向けた研究アイデアの発表を、学部2・3年生の方は卒業研究の構想やアイデアについて発表を行っていただければと思います。高校生や学部1年生の方でも、はじめの一歩として、授業等で調べたことでも大丈夫ですので、気軽に研究発表を行っていただければと思います。そのために若手の会では企画準備を進めていきますので、どうぞよろしくお願いたします。

(若手の会幹事 工藤大介)

常務理事会から

新しい世紀を迎えて

「新しい世紀を迎えました」。子どものころ『暮らしの手帖』という雑誌の101号の編集後記にこう記されていて、胸が躍ったことを思い出しながら、雑誌『心理学ワールド』の新しい世紀をお届けします。新しい世紀はどのような世紀になるのか、「予測がつかない」というのが正直な気持ちですが、しかし日本心理学会が心理学研究者とそれを目指す人々、また社会の中で心理学の研究とその成果を受け止めて役立てていきたいとお考えのすべての皆様にとって、少しでも有益で、楽しく、豊かな世界をもたらしていけることを目標に精進していきたい、そう思いながらこの号の編集に携わらせていただきました。

また新しい世紀にふさわしく、表紙のみならず、装丁全体にも統一性を持たせていただくよう、新たにデザインをお願いしました。いかがでしょうか？ 今後、記事内容に加え、デザインについてもぜひご意見をお聞かせください。

学会と編集活動を取り巻く環境

前段で思わず「予測がつかない」と本音をこぼしてしまいましたが、2023年4月を迎える今、世界は様々な課題に直面しています。COVID-19パンデミック、異常気象と災害そして環境問題、社会分断化の兆しと「平和と逆行する」動き。これらが「普通の生活」を営む一人一人の暮らしに密接に繋がっていることを思い知らされる毎日が続いています。

心理学が「人間理解の要の学問領域」である以上、これらは無視しえない問題であり、考えるべき課題が山積みになっているといえましょう。同時にそれらは、学会運営活動にも直接的に、例えば物価の大幅上昇の形で押し寄せ、学会活動にも影を落としてきています。

とりわけ編集関連業務では、紙へ印刷・製本をしてお手元にお届けしていることを、どう考え、どのよ

うな見通しをもって、いつ意思決定をしていくか、具体的かつ難しい問題を抱えています。

紙 vs. オンライン、あなたはどうか考えですか？

こうした現状の中、日本心理学会が発行する機関学術誌のオンライン化をめぐって議論が活発になってきています。ご存じのように、『心理学研究』誌と“*Japanese Psychological Research*”誌のいずれも、完全公開のオンライン版と紙の冊子体を並行して発行しています。この「リッチな体制」をいつまで続けるのか、また紙媒体を廃止するとしたらどのような対策が必要か、考え始めると「単純ではない事々」が次々と出てきます。私自身、認知心理学を背景に、人と外界の人工物（ここでの雑誌）との相互作用が人の認知過程にどのような影響をもたらすかを考えているだけに、一足飛びな大胆な方向転換には少々躊躇いがあります。しかし確かに、世界の潮流はオンライン化に向かっています。個々の読者・利用者に「自由で負担のない使い方」を保証しつつ、より多くの会員（潜在的な会員予備群も含め）にとって、bestでなくともbetterな形とは何なのか、機関誌編集委員会で堅実に議論を重ねていきたいと考えています。会員の皆様からの、建設的なご意見をお待ちしています。

なお、本誌『心理学ワールド』は、学術雑誌とは一味違うミッションを担った存在です。こちらフルオンライン化の可能性の議論は出ておりますが、学会広報全体と併せての検討が必要なため、少し別に考えていきます。

次の1世紀、4号換算で25年後にどう変わっているのか、まずは（少しの強がりも含めて）「楽しみですね!」と言いながら、皆様との共創の中で幸せな変化を着実に形にしていければと思います。今後ともよろしく願いいたします。

（編集担当常務理事／筑波大学教授 原田悦子）

資格認定委員会より

1 認定心理士について

2022年度第4回委員会(通算第193回)が2022年12月17日に開催されました。12月8日までに受け付けのうち640件を審査し、609件を合格、23件を保留、8件を不合格としました。また、以前の委員会で保留または不合格と判断されたうち追加資料の送付された26件を再審査し、22件を合格、3件を保留、1件を不合格としました。この結果、2022年度の初回審査数は2,502件、総審査数は2,606件、認定可件数は2,464件、資格取得者数は1,936名となりました。資格取得者は累計70,372名です。次回認定委員会の開催予定日は2023年4月8日です(2023/1/31現在。例年は2月にも開催しておりますが、認定システム刷新作業のためやむなく休会といたします)。

2 認定心理士(心理調査)

(通称:心理調査士)について

前掲第193回委員会で、12月14日までに受け付けのうち5件を審査し、4件を合格、1件を保留としました。また、前回までに保留または不合格と判断された者のうち追加資料の送付された3件を再審査し、2件を合格、1件を保留としました。この結果、認定心理士(心理調査)の資格取得者の累計は445名となりました。

3 シチズン・サイコロジスト奨励賞に是非ご応募ください

2019年から、人々の心の健康と福祉の増進に寄与する活動をしてられる認定心理士の方々を顕彰する制度「シチズン・サイコロジスト奨励賞」を実施しています。これまでに4件(3名と1団体)に授与しており、この原稿を執筆している2月中旬の時点で2023年にご応募いただいた分を審査しており、受賞者が出た

場合は9月の第87回大会で表彰式が行われます。ご存じのとおり、認定心理士は学部で心理学を専攻された方ならばほとんどでも取得できる「手軽な」資格ですが、単に心理学を学んだことの証明という域を超えてそれを社会における実践に活かしてくださっている方を発見したい、というのがこの制度の意図です。これまでの受賞をみても、発達障がい者やその支援者の交流コミュニティ活動、認定心理士の相互交流の場の提供、自立・就労支援事業所への音楽療法の提供、矯正心理分野における実践活動とその内容は多岐にわたっており、着実な裾野の拡がりを心強く感じているところです。

本奨励賞には、認定心理士の資格をお持ちであれば(大学や研究所等にご所属でなければ)どなたでもご応募いただけます。実は、これまでは応募資格として日本心理学会の会員であることを求めているのですが、今回の応募からこれを撤廃しました。認定心理士資格をお持ちであればどなたでも学会の会員にはなっていないのですが、それをシチズン・サイコロジストとしての優れた活動を顕彰するための要件とするのはいかがなものか、という意見があってこの度の変更となった次第です。

募集は、毎年11月から翌年1月上旬にかけて行われます。今からならじっくりご準備いただけますので「自分の活動が賞に値するなんてとてもとても……」と尻込みすることなく、是非ご応募ください。また、他薦もOKなので、身近にそういう知り合いがいらっしゃれば是非ご推薦ください。よろしく願いいたします。

(資格担当常務理事・大阪大学教授 三浦麻子)

編集後記

特別企画、お楽しみいただけましたでしょうか? お気づきの通り、本号から紙面デザインも一新しています。新たな装いの下で、編集委員一同、変えるべきことは軽妙洒脱に変えてゆき、同時に変えるべきでないことはしっかりと守りつつ編集作業を楽しんで進めてまいります。読者のみなさまも、新たな『心理学ワールド』を編集委員に負けないくらいお楽しみください(でも簡単には負けませんよ)。引き続き、本誌へのご意見・ご要望もお待ちしております。(片山順一)

編集委員

編集委員長	片山順一(関西学院大学)	松田社一郎(筑波大学)
副委員長	荒川 歩(武蔵野美術大学)	明和政子(京都大学)
委員	牛谷智一(千葉大学)	村山 綾(近畿大学)
	小野田慶一(追手門学院大学)	山崎真理子(鹿児島大学)
	坂田陽子(愛知淑徳大学)	山本哲也(徳島大学)
	東海林 渉(東北学院大学)	担当常務理事
	橋本博文(大阪市立大学)	原田悦子(筑波大学)
	松田いづみ(青山学院大学)	

